

‘Bonin Islands’ の誕生

—この名称はいつ、どのようにして生まれたのか—

岩本 陽児 (和光大学 現代人間学部)

要 約

小笠原諸島の洋名 Bonin の由来をたずね、外国人への日本語の聞こえがこの語を生んだとの、いわゆる転訛説を批判的に検討しながら、江戸時代後期における小笠原諸島をめぐる、日欧の知的な交流のなかでこの名称が誕生した歴史的な過程を検証した。1786年刊の林子平の発禁本『三国通覧図説』をオランダ商館長ティツィングがヨーロッパに招来し、これがフランスの中国学者レミュザにより1817年の論文として紹介された際、「無人」の漢字に Bo-nin の綴りが与えられ、添付された仏語訳地図で BO-NIN が使用された。ロンドンで1820年に刊行された太平洋海図がレミュザ説からハイフンのない Bonin の綴りを採用したことで、現在見る Bonin 諸島の名称が広く普及した。

I. はじめに (研究の背景および目的)

小笠原諸島には英・独・仏語で Bonin Islands、Bonin Inseln、îles de Bonin との名称がある。ボニン諸島。何とも不思議な響きだ。率直なところ、言語として、ある種の不自然な語感をわたしは感じた。そこで、この言葉の起源を尋ねたいと思い、穿鑿をこころみた。

この Bonin は、いくつかの外国語辞典によると「無人 (ぶにん)」に由来するという。日本語起源の外国語ということである。若干の例を挙げるなら、小学館『ランダムハウス英和大辞典』(注1)は発音、語釈のあと[無人 (ぶにん) より]としており、同社の『プログレッシブ英和中辞典』(注2)も[日本「無人 (ぶにん)』と解説している。研究社『リーダーズ英和辞典 第2版』7刷(注3)は Bó·nin Íslands/bóunin/pl [the ~] 小笠原諸島. [「無人」のなまり] とする。

ボニンの元となったとされる「無人」の日本語読みについて、まず見ておきたい。

日本語の漢字の音読みには一般に、呉音、漢音、唐音 (もしくは唐・宋音) の区別がある。呉音は中国の都が現在の南京に置かれていた六朝時代 (222-589年) の、呉・越の発音に倣ったもので、日本へは百済人が伝えたとする (世界大百科事典)。一例を挙げるなら、「利益」をリヤクと読むのが呉音である。

漢音は唐（618-907 年）の時代の長安、洛陽の発音にもとづくもので、奈良朝後期から平安朝にかけて遣唐使や留学僧たちによって伝えられ、これが「正音」とされた時代もあった。漢音では、「利益」をリエキと読む。

ほかに唐音があるが、これは呉音と漢音の定着後、あらたに日本に伝わった漢字音で、複雑な背景をもつ音読みとされる。

さて、「無」の呉音読みはム、漢音読みはブである（唐音でモという読みがあると書いている辞書もあるが、Bonin については聞かない）。

同様に「人」は、呉音読みでニン、漢音読みでジンとなる。すなわち無人という熟語の呉音読みはムニン、漢音読みはブジンとなる。両者が混在しているブニン・ムジンの読みは、後年、日本で独自に行われるようになった発音を示唆している。

これでまず、無人には呉音よみのムニン、漢音よみのブジン、両者混在のブニン・ムジンの 4 通りがあることが分かった。その上でのこととなるが、国語辞典類では、無人をどう読んでいたのだろうか。ややさかのぼってみる。

調査の結果、20 世紀初め頃までの辞典等では、意外なことに無人の見出し語に「むにん」の読みを採用していることが分かった（注 4）。むじん・むにん双方の表記が現れるのは、時代が下って 1930 年代に入ってからである（注 5）。さらに、無人をブニンと読んだ場合には、人がいないという客観的な状態を単に指すというより「無人（ぶにん）で淋（さむ）しくって困る」「無人で淋しい」（夏目、1914）等、主観が投影されたやや特殊な表現となることも分かった。

以上の検討により、ボニンという漢字の音読み（日本語読み）が存在しない、すなわちボニンは日本語ではないことが確認できた。

次に考えたのが、Bonin に直結するような「無人」の中国語読みがないだろうかということである。中国語はお互いに通じない「方言」で構成されている。

現在、中国の共通語（普通語）となっている北京語だと、無人は wu-ren（ウーレン）である。しかし、北京語が共通語になったのは意外にも 20 世紀に入ってからのもので、それ以前、明・清の官話（官僚が話す言葉、いわゆるマンダリン）は、南京官話であった。江戸時代に長崎の唐通事（とうつうじ）が学んだ「漳州口・福州口・南京口」は、いずれも南方系の中国語だった（注 6）。

それでは、南京官話で無人をどう読んでいたのだろうか。19 世紀半ばに中国に赴いた英国人宣教師で中国学者の Joseph Edkins, 1823-1905 中国名：艾約瑟なる人物が『南京官話教科書』（注 7）（Edkins, 1862）を刊行していた。そのページを写真に収めた論文（塩山、

2017) を点検したところ、彼が無を「.wu」人を「.jen」と表記していることが分った。「.」は声調を示し、無も人も5声(下平)という。しかしローマ字表記が分かったところで、1958年に中華人民共和国が制定した拼音(ローマ字による発音表記)を約百年さかのぼる英人宣教師の発明にかかるローマ字表記がいかなる発音だったのかが、そもそもはっきりしない。「.jen」の読み方は、呉音読みのニンよりも漢音読みのジンに近かったのではないかとあえて推測するなら、20世紀初頭まで中国語の主流であった南京官話もまた Bonin には直結しないということになるか(注8)。

中国の中では、海に開かれた地域の多い南方で方言の分化が進んでいる(注9)。南京官話は不発だったが、その他の方言のなかで Bonin と表記されるような発音がなかったかと調査をした。その結果、台湾語では無人は bo-ran (ポーラン)。広東語で mou-yan (モウヤン)。大陸と香港では、おなじ広東語でも微妙に違う場合があるというが、香港の広東語も同様 mou-yan (モウヤン) であった。客家語では mou-nin (モウニン) となる。Bonin の発音に直結する中国語も、どうやら見当たらないとの結論に達した。

つまり Bonin は、日本語でないばかりか、中国語から見ても怪しげな言葉ということである。順当な説明を越えた「何か」があったのではないかと推量される。ボニンはいったいどこから来たのだろうか？

この時、意外な記述に接する機会があった。以下に引用する。

「因みに、レミュザの『新アジア論叢』巻2の末尾には、折り込みで「無人嶋図」(carte des iles Bou-nin マ ou Inhabite's) という地図が附いている(注10)。寺が一軒書いてあるところから見ると、完全な無人島ではなく、現在の小笠原諸島らしく見えるが、それはともかくとして、そこに片仮名で「ブニンシマ」とルビが同じく筆で書き添えてあり、「これはレミュザが日本の諸地図から抜粋した地図である」という註記が目を引く。その漢字と片仮名がレミュザ自身の手になるものであるかどうかは決めたいが、かれが日本の文字にも関心を向けていたらしいことは判る。フランスのシナ学者は、伝統的に日本人の研究に注意するものであるが、その傾向はすでに初代の教授の中にあっただいことができるであろうか。」(福井、1983、pp.257-258、注11)

著者、福井文雅は天台宗僧侶の仏教学・中国学者で、執筆時は早稲田大学教授であった。福井によれば1815年にコレージュ・ド・フランスにレミュザを迎えて初めて中国学講座が開かれ、以前の宣教師を中心とする研究から「フランスのシナ学は面目を一新」、これがヨーロッパにおける「近代的中国研究の始まり」だったという。上記、引用箇所は「因みに」で始まっているように、論文の主旨であるフランスの中国研究からはまったく脱線している。しかし、本稿のテーマである Bonin の由来には、有益な情報であると見えた。中国学研究はさておき、Bonin の起源は19世紀の比較的はやい時期のパリの中国学者にさか

のぼり、しかも Bou-nin の綴りで始まった可能性があるという。これをひとつの起点に、Bonin の由来を探求することにはそれなりに意味があるのではと思われた。

Ⅱ. 「転訛説」の検討と無人の読みかた、および非転訛説

その前に、この Bonin の発生について、過去にどのような説明が与えられてきたのかを確認しておきたい。結論を先取りして述べると、すでに辞書の調査の節で述べたことの繰り返しになるが、Bonin は「無人」がなまってできたとの説明が大半を占めると言ってよい。本稿ではこれらを「転訛説」と呼ぶこととするが、その中にはさらに無・人の日本語読み（ム・ブとニン・ジン）の組み合わせ読みに時代的な先後関係を求めようとする説も提起されていることが分かった。

その委細は以下に記すこととして、「転訛」とはどういうことだろう？まず、確認しておきたい。

『広辞苑第三版』は、「語の本来の音がなまって変ること。また、その語。テマエ（手前）がテメエになる類」と解説する。『日本国語大辞典』は「(1) 文字の写し間違い、(2) ことばの本来の発音がなまってかわること」として「口より口に伝へて、益々転訛したる言伝なれば」との用例を紹介している。

すなわち転訛説とはこのばあい、日本語の発音が、聞いた外国人の耳に Bonin と聞こえ、この綴りを生んだとの説明と理解してよさそうである。「日本人が犬の吠え声をワンワンと聞くのに対し、欧米人はバウバウと表音するように。聴覚は文化の反映なのである。」(岡村、1993、p.180) というように、発音の聞こえ方が文字（表記）を作ったとの説明はある意味合理的で、受け入れられやすいものがある。

1. 転訛説による説明の実例

それでは、Bonin が転訛によって発生したとの諸説を、具体的に見ていくことにしよう。

延島 (1996) がこの問題を掘り下げて議論している。「さらに以前の江戸時代には無人島と呼ばれ、それが外国には Bonin Islands (ボニンアイランド) と伝えられた」(下線引用者)「では、何がボニンと転訛したものか」と先行する説明の実例を幅広く渉猟していて圧巻である。転訛説による説明は枚挙にいとまがないように見える。当該論文を参照していただくのが一番だが、インターネットで公開されていないこともあり、長くなるのを厭わず以下に引用することとしたい。ただし当該論文では各用例の書誌を本文でなく巻末「引用文献」に記載している。以下の引用・紹介は、当該論文本文からのものである。

○「・・・ムニントウとかブニントウ、またはブニンジマと発音した。・・・それを外国でも使ったが、少し

訛って Bonin Island とか Bonin Shima とかいった」(前川)

- 「無人島 [ぶにんじま]」(Bonin Islands) にちなんで、無人岩 [ぶにんがん] < Boninite [ボニナイト] という名がつけられています> (貝塚)
 - 「英語名で 'Bonin Islands' という。これは日本語のブニン、つまり無人からきたもので、かつてここを無人島 [ブニンシマ]」と呼んでいたのに由来している。」(小野)
 - 「これは無人島の 'むじん' が訛って、'ぶにん→ボニン' となったと言われています」(小田)
 - 「ボニンは無人 [むじん] がなまったものだ。」(千世)
 - 「日本語の無人 [むじん] はブニンとも読めますね。ほらブニンとボニン、近いでしょう。そうです。ボニン諸島 [しょとう] は無人諸島 [むじんしょとう] のことだったのです。(なだ)
 - 「日本語の無人 [むにん] が欧米系の人々には 'ボニン' と聞こえたらしく、いつしか小笠原諸島の国際名はボニン・アイランズになってしまった。」(飯田)
 - シーボルトは、Munin sima 説
 - ベリーの報告書「元来の名は小笠原島といふも、普通には無人島(支邦語では wu-jin-ton (Hawks)
 - ベリーも引用している林子平の三国通覧図説のクロプラート訳マ [フランス語] (Klaproth) では、地図には「Iles Mouninsima ou Okassawarasima」、本文には「島 原笠小 O gasa wara sima 島人無 Mou nin shima (Woujintao) とある。
 - アメリカ艦隊の小笠原諸島来航を伝える英字新聞「・・・住民には全く会わなかったので、島をムニン Woo-nin (もしくはムジン Wujin) と呼んだ。ここから現在の名の『ボニン』すなわち『人のいない島』となったのである。(ノースチャイナヘラルド)
- つぎに延島は、江戸時代の「無人」の日本語読みを検討している。
- 「無人は『ムニン』<シーボルト>、『モウニン』<クロプラートマ>、『モンニン』<ベリー>、『ウォニン』(ノースチャイナヘラルド) から『ボニン』に変化していることが分かる。『むじん』『ぶにん』からではなく、『ムニン』から転訛したものと思われる。」として、漢字熟語「無人」の日本語読みについて、江戸時代以降の用例を次のように紹介している。
- 弘化5年 [1848] 『八畳の寝覚草』(鶴窓) では「むにんじま」とふりがな。
 - 辞典類の調査から、江戸時代後期においては「むにんじま」の呼称が主で、「むにんとう」とも言われていたが、「むじんとう」という呼び方はなかったと推定される。
 - 明治初期の『漂流奇談全集』(石井) はむにんたう、むにんとう、一例むじんたう。ぶにんは見えない。
 - 『小笠原遊覧図譜』(斃石) むじんたうのルビ
 - 『大字典』(上田他)、「無人=ぶにん 人手の少なきこと むにんたう=人の居住せぬ島」
 - 新村『広辞苑』むにん、むにんとう>むじんとうを見よ

○『日国大』むじんとうの用例は国木田独歩、『酒中日記』

これらの検討を経て延島は「日本語の『ぶにん』は人手の少ないという意味に使われ、『むにん』は住む人のいないことを指すから、無人島は『むにん島』である。よって『ぶにん』から『ボニン』になったという説は正しくない。『むにん』から『ボニン』という言葉が外国で生まれたのであって、日本語が外国語になった数少ない例であろう」と結論付ける(下線、引用者)。ここでの論点はふたつあるように見える。すなわち当該論文の冒頭では「無人島と呼ばれ、それが外国には Bonin Islands (ボニンアイランド) と伝えられた」としたものが「『ボニン Bonin』という言葉が外国で生まれた。」となっている点①である。このボニンは日本語の読みのひとつムニンから生まれた②。(下線、引用者) それぞれについて、後ほど検討を加えることとしたい。

延島(1996)が採録した上記の用例以外にも、転訛説に基づく説明は各所で行われていた。管見によれば、たとえば次のようなものがある。

- 「日本側の記録にある“無人島”をなままって発音し、西欧の地理航海書には、“ボニン・アイランズ”と命名記載されてきた。」(大熊、1985、p.6)
- 「長らく無人島であった小笠原諸島に、諸外国の捕鯨船や軍艦が立ち寄り始めたのは近世になってからのこと。これら航海者の間で、いつしか無人がブニンとなり、やがてボニンと訛って発音されるようになった。ボニン・アイランズという呼び名は、今でも島で生きている。」(榊原・飯田、1989、見返し)
- 「この巡見を機に幕府は島々を「無人島」と名づけ、19世紀前半まで小笠原の固有名として用いてきた。「無人島」は「ぶにんしま」と読み、Bunin (ブニン) が小笠原の英名 Bonin (ボニン) に転訛したと考えられている。」(船越、1992、p.39)

榊原・飯田(1989)の「無人」は「ムジン」と読むのだろうか。船越が江戸時代初期と紹介した、現在の小笠原諸島への「無人島」の命名については、国立国会図書館デジタルコレクション『小笠原島記事巻之二十六』に収録されている延宝三年『島谷市左衛門覚書』が典拠となった可能性があるが、この読みがなぜ「ぶにん」なのかの根拠は示されていない。この『覚書』については、のちに検討を加えたい。

○Bonin (Islands) の語源が日本語の「無人(ぶにん)」であることは間違いありませんが…(ロング・橋本、2005、p.136)

も、この流れを汲むものであろう。辞書の説明と同じく、最後が Bonin と決まっている以上、無人はその前段階でブニンと読まれなくてはならなかったかのようである。延島論文は、このことに疑問を呈した。



図1 1848年に刊行された『伊豆七島全図 附無人島八十嶼図』（部分）

西尾市岩瀬文庫／古典籍書誌データベースによる。

<https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2321315100/2321315100100010/903-037-00-01/>（最終閲覧日：2020年3月20日）

図20、21の更に4年後に刊行されたが、60年前の林子平の図から大きな変更はない。右上にある標題わきの、紙面全体の約四分の一のスペースを使って、「附 無人島」について詳しく紹介している。

「訛って発音される」と、発音を介在させるのが転訛説の特徴であることはすでに述べたが、Boninに関しては「テマエ、テメー」よりも、ことが複雑である。こんにち無人島と書けばムジントウと読むのがふつうなので、われわれになじみ深いムジンの読みを起点に、ブニンになりポニンになったとの説明が行われている。Bonin Islandsのポニンがすでにあるものだから、「無」と「人」との音読みについて可能な限りの組み合わせを検討し、その中からBoninを導きだすのが発展した転訛説のひとつの特徴といえるのかもしれない。

ところが「無人島」の読みについて、平野（2001、pp.376-382）は「ムニンシマ（もしくはムニンジマ）の読みを確定したい」と述べる。1848年に刊行された『伊豆七島全図 附無人島八十嶼図』（図1）における「無人島」の書き出し部分に「無人島ムニンシマ、一名小笠原島ヲカサワラシマ。」とふりがながあったとし、ブニンやムジンではないというのが平野の指摘である。このフリガナについては、その後、幕末の小笠原調査隊に加わった阿部樸齋の知識によるものであった可能性が高いとしている。「無人」がさまざまに読まれたことを前提にしてきた上記の諸説にとっては、制約条件となる指摘と言えよう。ただ、図1にあげた岩瀬文庫図、および国際日本文化センター所蔵地図データベースに収録されている同図には、そのようなふりがなは認められない。

ところで、転訛説に対して素朴な疑問を呈しておきたい。いわゆる鎖国の江戸時代であって、諸外国の捕鯨船や軍艦の乗員が、そもそも日本語を耳にする機会があったのだら

うか。私には、あまり、あったようには思われないのである。「いつ、どこで」を明らかにできない点に、転訛説の弱みがあるように感じられる。

2. 転訛説の起源について

では、この転訛説の起源は、どこに求められるのだろうか？

研究論文の中で「転訛」という言葉でボニンを説明しようとした早い例が、管見では安岡（1960、p.78）である。安岡はこう述べている。

「無人島の呼称は、『三国通覧図説』のフランス語訳、またケンペル、シーボルトの著作、ペリーの日本遠征記によって欧米に知られ、MUNIN → BUNIN → BONIN と転訛したので、Bonin Islands という名称が一般化した。」（下線、引用者）

補足すると『三国通覧図説』のフランス語訳は、クラブロートによる全訳出版が1832年。ケンペル『日本誌』がこの中では一番古く、英語版の出版が1727年である（注12）。本書が、小笠原について紹介した最初の図書とされている（注13）。ただしこれはBunesima（ブネジマ）としており、Boninではない（注14）。これについても、後ほど検討を加えたい。シーボルトの著作『日本』は1832-1854年の刊行だが、ケンペルやクラブロート訳の『三国通覧図説』を参照している。ペリーの『日本遠征記』（1856年）は、シーボルトも含めた先行研究を渉猟したものである。年代順の整理でない点が気になるが、研究論文の中でボニンを「転訛」で説明した早い例かと思う。

研究論文以外に目を転じると、管見によれば古くは田辺太一がすでに転訛説を唱えていた。良く知られているように、田辺は文久年間の水野筑後守の部下として小笠原巡察に参加し、その後明治政府に仕官した。1875（明治8）年の小笠原再回収のため明治丸で父島に来島し、これを追って英艦カーリユ号で父島に来たロバートソン領事に小笠原の日本領有を認めさせた重要人物である。明治31年に刊行した幕末外交回顧録中で田辺は、1827年の英海軍測量艦ブロッサム号の小笠原来航に関し、次のように述べている。

「世に出ている地図には、この新しくつけられたペリーの名は用いられておらず、ボニン群島と記している。これは住む人がいないので、わが国で無人島とよんでいたのを転訛したものであり・・・」（下線、引用者。田辺・坂田、1988、p.223）

おそらくこれが、転訛説のもっとも早い例であろう。

ちなみに、この坂田訳からでは「無人島」の読みは分からない。ところが念のために原文に当たってみると、該当箇所は：

「世に行るる地図上には、この新に名つけたるペリーの名を用いすこれをボニン群嶋としるせり、これその人の住居するものなきより、我国にて無人嶋とよべるムニンの

転訛せしものにて・・」。(下線引用者)「無人嶋」を田辺がムニンと読んでいたことが、はからずも明らかとなった。田辺 (1898、pp.189-196「小笠原巡視」の条 (注15))

かように、転訛説は広く受け入れられ、今に至っている。

3. 非転訛説について

こうした転訛説に対し、「『ムジン』→『ムニン』→『ボニン』と転訛したとする通説は誤りといえよう」と指摘したのが田中 (1997、p.22) である。その根拠として田中は、ドベルグ (1989)、大熊 (1985) にもとづき、次のストーリーを紹介している。

「1817年、フランスの東洋学者アベル・レミューザは、フランスアカデミーの機関誌に『三国通覧図説』から、この無人島について地図を添えて紹介した際、この地図に「日本の地図から抜粋したBO-NIN諸島または無人島の地図」と題している。レミューザは、日本人は「無人島」を「ボニンシマ」と呼んでいると考えたという。こうして小笠原諸島の洋名「ボニン」は、これ以後アロウスミスの地図などヨーロッパの地図に記されるようになったという。」

「という」の繰り返しは、二次資料に準拠しているためであろう。これに比べて、オーストラリア人研究者チャップマン (2014、pp.14-15; Chapman, 2016、pp.2-3) の所説は明快である。2016年の著作からかいつまんで紹介すると、出島商館長ティツィング (1745-1812) は中国語、日本語を含めた7言語を解する人で、彼が入手して翻訳文もつけていた『三国通覧図説』を、没後、その息子が売りに出した時にレミューザが買い取った。レミューザは無人をBoninと読み間違え、1817年にJournal des Savans誌7月号に発表した (翌年には英語版をAsiatic Journal誌に発表した)。この間違いを、アーロン・アロウスミスが1818年にアジア地図に印刷して普及した云々。これは、Klaproth (1826) の記事に拠るものと思われる。後ほど、検討を加えたい。

Ⅲ. 歴史的理解の試み

以下、こうした先行研究に準拠しながら、物証を確認しつつ、転訛説によらない「Bonin Islands」ということばの誕生の経緯を明らかにしたい。結論を先取りするなら、Boninの名称は、小笠原諸島に定住者が現れる1830年より以前に、すなわち小笠原が無人だった時代にすでに確定していた。さらに言えばこのBoninはパリ生まれ、ロンドン育ちだった。このことを、以下に例証したいと考える。

1. 18世紀前半までの小笠原理解

1593（文禄二）年に小笠原貞頼が小笠原を探検し、翌年にも再渡航したとの子孫の申し立てによる伝説は、早くに幕府の調査によって否定されたにもかかわらず、幕末・明治に領有権主張に関わり島名として公式採用され、今に至るといふ紆余曲折の経緯を持つ。

16世紀半ばから17世紀前半にかけて、ヨーロッパ船が日本近海に来航した。これらは、北西太平洋にあるとヨーロッパ人に思われていた「金銀島」（注16）探索の艦隊である。その結果、今日の得撫島や択捉島が発見された。

19世紀にはいってなお、総面積100平方キロを超える群島がいずれの国家の実効支配をも受けていない無住の地で、地図・海図にも正確には記載されない状態にあったという事実は、世界史的に見ても珍しいことであろう。それでも、やがて北太平洋・北極圏における北西の船舶の航路（ノースウェスト・パッセージ）を踏査発見する航海の途次に、小笠原への上陸調査が行われるようになる。その頃には、“無人島”（ボニン諸島）という、人の住まない島々の存在が、日本に関する地理的情報として、あるいは“無人島”にまつわる伝承（小笠原貞頼発見説）として西洋に伝えられていた（大熊、1985、pp.3-4）。上陸調査によって実態が知られる以前に情報が先行していたことは、小笠原の歴史を特徴づけている。国土交通省都市・地域整備局（2006）、小笠原村産業観光課（2007）等の類書を参考に年代を追ってみると、次のような「発見」が行われていた。じっさいには、望見と呼ぶのがふさわしいかもしれない。

- 1543（天文12）年 スペイン船サン・ジャン号（注17）ベルナルド・トーレ船長が火山列島を発見
- 1639（寛永16）年 オランダのエンゲル号とクラフト号が小笠原諸島を発見
- 1643（寛永19）年 オランダのド・フリースが小笠原諸島を発見（注18）
- 1702（元禄15）年 スペイン船ロザリオ号が西之島を発見
- 1727（享保12）年 オランダの医師エンゲルベルト・ケンペルが『日本誌』を刊行（注19）

2. 「無人島」命名の時期

日本側からの小笠原諸島へのアプローチを、次に見ていこう。1670（寛文10）年の阿波国の蜜柑船の遭難、母島への漂着・帰還と政府への届けが、小笠原諸島が知られる最初のきっかけとなった。この時の記録は明治時代に石井研堂が編集した『漂流奇談全集』に「阿州船無人島漂流記」として収録されている（石井、1908）。この遭難報告により無人島の名称が与えられたとする向きもあるが、本文を構成する寛文十年戊八月十日付の「阿波

国海部郡浅川浦水主（かこ）安兵衛、彦之丞、三右衛門の口述」および、「同上紀州藤代長左衛門（注20）口書」が使用しているのはともに「島（嶋）」「右之島」等の呼称で、本文中に無人島の語を使っていない。「無人島」の標題は、編者石井がつけた可能性がある。

さて、この蜜柑船遭難の一件を受けて、1675（延宝3）年に幕命による長崎代官末次平蔵による無人島（小笠原諸島）調査が行われることになった。この委細は類書に譲るとして（注21）、この時に探検調査の指令を幕府勘定奉行が長崎代官、末次平蔵にあてて発した書簡中でも「八丈島辺二人無嶋有之二付（はちじょうじまへんにひとなきしまこれあるにつき）下線及び読み下しは引用者」とあり、この時点でも無人島ということばがまだ使用されていなかった可能性を指摘できる（「嶋谷市左衛門覚書」、注22）。

「嶋谷市左衛門無人島へ乗渡覚書」「無人嶋巡查記」によれば、調査隊長となった嶋谷（嶋谷とも）市左衛門（～1691（元禄4）年没）の一行は、1675年閏4月29日に最初の「大島」を発見して着船。5月1日に上陸。10日には小舟が完成し、沖の島に出船。15日に「南の大島」に到着し、翌朝から周回調査。19日に出発して「本島」に戻り、さらに兄島、弟島と思われる島々を調査した。宮之浜に大神宮を勧請し、日本領の標識を立てたのち6月5日に日本に向けて出航し、12日に伊豆下田に着船、復命している。西洋式の測量により地図・海図を作成し（注23）、博物標本を持ち帰った。この時の報告書で、島々の「総名」を「無人島」としている（注24）。これが幕府に採用されて、上記した無人島（注25）の命名につながったと理解したい。『嶋谷市左衛門覚書』の末尾近く（国立国会図書館のインターネット公開で言えば32コマ目）「彼島之名を無人島と御付被為遊候旨被仰出候」（かの島の名を無人島とお付け遊ばされ候旨仰せ出だされ候）は、そのことを言っている（注26）。この時、無人島が一般的な普通名詞から、小笠原諸島の固有名詞となった。ただし、その後、こんにちの鳥島に漂着、帰還した船員の取り調べ書でも、「無人島」の語は使用されている。

3. 小笠原貞頼による小笠原発見伝説

嶋谷の探検隊が帰還した1675年、小笠原長直と称する武士が、次回の無人島探検にはぜひ、自分たちを行かせていただきたいとの訴状を幕府に差し出した。いわゆる小笠原貞頼発見伝説の始まりである。これは27年後の1702年、長直の子と称する小笠原長啓による渡海願いとなり、さらに25年後の1727年には、長啓の子と称する小笠原貞任による渡海願いとなった。これは幕府と、小笠原宗家の家系図調査の結果、貞任の身分詐称が明らかとなり、1735年に貞任が重追放の刑に処せられて終わる（注27）。このことはBoninの呼び名とは直接関係ないため深入りしないが、この間に現れた『巽無人島記』本文の記載お

よび地図は、その後の社会に少なからぬ影響を及ぼしている。その最たる例が、幕末以降現在にも続いている小笠原島・小笠原諸島の名称であることは言うまでもない。

4. ケンペルによる日本紹介とブネシマ

いわゆる鎖国の江戸時代にあつて、ヨーロッパ世界との唯一の窓口となつたのが、長崎・出島のオランダ商館である。ヨーロッパ世界からすれば、ここは日本を知る唯一の窓口であり、非ヨーロッパ世界に向けられた知識人の関心を引き付ける場所でもあつた。

1690（元禄 3）年にオランダ商館長付き医師として来日、1692 年秋まで滞在したドイツ人 Engelbert Kämpfer（1651-1716、Kaempfer とも）は、日本についての詳細な情報を西洋世界に紹介した中で、小笠原について最初に言及した人物とみなされている（Rémusat, 1817）。彼は来日後 1691 年と翌年の 2 回、商館長の江戸参府に随行し、將軍綱吉に謁見した。そして、学者との交流を通じて日本について総合的に研究し、多数の文物を持ち帰つた。

日本語の出来ないケンペルが 2 年余という比較的短期の滞在にもかかわらず、画期的な情報収集および標本等の収集活動を行い得た背景について、先行研究は 2 点指摘している。ひとつはケンペルより 20 年ほど前に、一年任期のオランダ商館長を 3 期（1671-72、73-74、75-76）務めたあと西洋人が 2 万人居住するバタビアの総督となつていたカンブハイス（Camphuys Joannes, 1634-1695）が事前に、オランダ商館の機密事項も含めた日本に関する十分な情報をケンペルに与えていたこと。もうひとつが、医療活動を通じてコンタクトを広げながら日本人の情報提供者を作つていったことである（ボダルト＝ベイリーほか、1995；クライナー、1996）。とりわけ、小使い兼学生として雇用した通詞今村源右衛門英生がケンペルの情報収集活動の実務を担当した。今村にケンペルはオランダ語を文法的に教え（注 28）、意思疎通が出来るようにしたうえで医学を教え、かつ多額の報酬を与えて身近に置いた。この時の今村は正規の通詞と違い、オランダ人の身近に接することのできる格下の内通詞で、稽古通詞合格はケンペルの帰国後だった（片桐、1995、2004）。英生は通詞の息子だったので出島での身体検査を免除されており、日本の本を密かに出島に持ち込むことが出来た。ケンペル自身の言葉が、日本文献の持ち込みや翻訳作業が「上役人と通詞」たちの協力でなされたことを暗示している（ボダルト＝ベイリー、1994）。

ケンペルの名著『日本誌』は没後の 1727 年に、相続人となつたケンペルの甥から手稿を買い取つたアイルランド出身の英国医師・博物学者ハンス卿スローン（1660-1753）の委嘱を受けたショイヒツターの英訳により、まず英語版として出版された。ケンペルが『日本誌』を出版したとする類書もあるが、かれ自身が出版したのではない。続いて 29 年に仏

訳・蘭訳（注 29）が出版され、独語版はずっと遅れて 1777 - 79 年だった（注 30）。本書の日本に関する記載はフランスのいわゆる『百科全書』にも継承され、ヨーロッパにおける日本理解に大きな影響を及ぼした。ボダルト＝ベイリー（1994、p.19）は、ケンペルの日本に関する著述は、19 世紀後半でも影響力があったとしている。ただし、『日本誌』がケンペルの手稿そのままではなく、翻訳者による修正というよりもむしろ、現代的な用語ではおそらく改竄と呼ぶべきものが加えられ、そのことがかえってヨーロッパ社会に受け入れられることに貢献したとの指摘がある（注 31）。『日本誌』の中でケンペルは、日本の幕府が発見した、八丈 Fatsisio のさらに南にある小笠原諸島について、Bunesima の名称で紹介している。

これについては、どう理解したらよいだろうか？

まず、発音と表記の関係が気になるところである。一般的なことではあるが、日本語の綴りの表記については、かつてイエズス会のザビエルが標準ポルトガル式を定めていた（柳谷・村上、1969、p.4）。時代が下りこうした規範が弱まると、報告者によって同じ地名でも異なった綴りで表記されるようになる。ケンペルも、そうした一人である。しかし、ミヒェル（1993）は、「彼（ケンペル＝引用者）はできるだけ「正確に」、聞いたまま、又は聞こえたように日本の音韻を記録するため、あらゆる表記法を試している。繰り返し写された彼の地図では、17 世紀末のドイツ語の表記が底流になっている。場合によっては、ドイツ語を読むつもりで声に出してみないとわからないこともあるが、たいていは日本語にかなり近いものになっている」と述べている。とすれば、ケンペルの耳にはそのように聞こえたのだらうとある種の「転訛」を推測するほかなさそうである。ミヒェルはまた、「当時の研究所や出版社での種々の間違いは、特にある地図が他の国で再刊される場合に頻繁に起こった。本来の日本語の音韻についてはほとんど知らなかったにもかかわらず、自国の同胞に読みやすくするため地名の綴りを書き換えるのが普通であった」とも指摘している。とすれば、場合によっては、大英図書館が所蔵する手稿に当たってオリジナルの綴りを確認する必要があるかもしれない。今後の研究課題としたい。

もう一つの疑問が、ケンペルの名付けた Bunesima はなぜ普及しなかったのかということである。ボダルト＝ベイリー（1994）が述べるように、出版の百年後までヨーロッパ世界への影響が大きかったと巷間言われるようなケンペル『日本誌』の評価からすれば、幕府の命による公式調査隊の情報を一部盛り込んだケンペルの Bunesima が拡散・定着してよさそうなものだが、実際にはそうならなかった。

一つの理由として、次の点を指摘しておきたい。

ケンペル『日本誌』のフロントページには、日本王国図（図 2）が印刷されている。こ



図 2 「日本王国図」(Kaempfer, 1727)

国際日本文化研究センターによる。

<https://kutsukake.nichibun.ac.jp/obunsiryu/map/005428255/> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)

右下、恵比寿・大黒の間に八丈島が描かれている。その更に南に位置する小笠原諸島 Bunesima は、描かれなかった。底本となった地図(図 3)に描かれていなかったからである。



図 3 1678 年に刊行された「新撰大日本図鑑」

西尾市岩瀬コレクション古典籍書誌データベースによる。

<https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2321315100/2321315100100010/901-268-00-01/> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)

Kaempfer (1727)『日本誌』添付地図のオリジナル。北以外が「上」として描かれた最後の日本地図とされ、画面手前が北、上方が南である。左上(南東)に八丈島が描かれている。1675 年の島谷調査隊の小笠原探検の成果は盛り込まれていない。なお、大英図書館ケンペルコレクション本は同版だが、刊年記を削除した後版との注記がある。

の日本地図もまた、欧州での評価が高かったとされる。

ケンペルは持ち帰った四枚の日本地図から、ケンペル自身が編集した日本地図の下書き（現在、大英図書館に保管されている）を作成したが、この地図は『日本誌』に掲載されてから、百年以上の長きにわたって定説となり、シーボルトが新しい資料を持ち帰るまで、一般に通用していた（クライナー、1992）。この地図が、後年の多くの地図製作に影響を与えたとの評価もある（島田・島田、2006）。

ケンペルが持ち帰った日本地図が、1678年に刊行された「新撰大日本図鑑」（図3）であったことを、先行研究が明らかにしている（注32）。上杉和央は京都大学大学院文学研究科地理学教室ほか（2007、p.45）で本図について、航路の記入や蝦夷地の記述が詳細な点など従来の日本図にはない特徴を備え、正確さは別としても諸国の郡数・石高・城主名といった武鑑的要素が初めて表現された点は、地図史の中で十分に評価しておかなければならないと評価する（注33）。こと小笠原に関して言えば、これは島谷市左衛門による無人島調査の3年後に刊行されたものではあったが、小笠原（無人島）への記載を欠き、南が八丈で終わっていた。従って、ケンペルの「日本王国図」も 'Fatsisio' どまりである。もし本図が無人島を紙面に収録していたら、またはケンペルが、長崎に伝わる島谷市左衛門「無人嶋乗前図」を得ていたら、小笠原に関して違った展開があったかもしれない。しかし、歴史はそうは動かなかった。

IV. 18世紀後半の小笠原理解、特に林子平と海外情報の還流

次の大きな展開は、18世紀も終盤近くにおこった。幕臣の次男として江戸に生まれた林子平（1738-1793）は、一般に経世論家とされている。現代ならさしずめ、外交・軍事評論家だろうか。家庭の事情で仙台を本拠とした林は、全国を行脚した。江戸の蘭学者との交流の一方、長崎を三度訪れて出島のオランダ人から北方海域におけるロシア南下のリスクを聞かされ、1786年（注34）に『三国通覧図説』、1787-91年に『海国兵談』全16巻を出版した。これが1792年に至り幕府の忌諱に触れて両書ともに発禁、版木没収・破棄、本人は蟄居となり、翌年56歳で没している。

本稿のテーマである Bonin の誕生にかかわっては、この『三国通覧図説』がきわめて重要な意味を持つことになる。本書のテーマ的には日本を取り巻く三国つまり琉球、朝鮮、蝦夷がメインであったが、林はこれに長崎で書き写してきた島谷市左衛門系の小笠原諸島地図「無人嶋大小八十余山之図」（図4）を添え（注35）、「本名小笠原嶋ト云」と、小笠原貞任起源の但し書き、および独自の意見を書き込んでいた。『三国通覧図説』が後年、出島からヨーロッパに招来され、鎖国日本に関する貴重な情報として注目を集めることとなった。

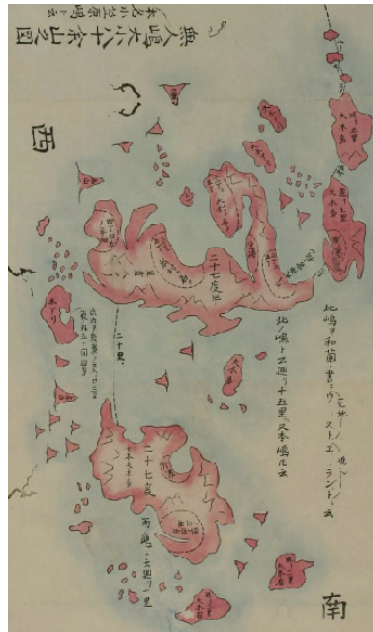
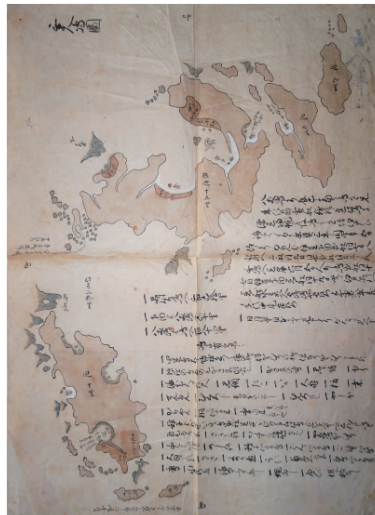


図 4 「無人嶋大小八十餘山之図」(林、1786)

横浜市立大学所蔵の古地図データベースによる。

http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~yuc-rare/pages/WC-1_16.html (最終閲覧日: 2020年3月20日)

発禁となった『三国通覧図説』に添えられた印刷地図。本来、東が上だが、便宜上北を上にした。「北ノ嶋」父島の二見湾が、真北に開口していることがわかる。



複製「図文三才」複製委員会「一景図説」【複製】

図 5 本光寺所蔵「無人嶋図」(松尾、2019 による)

長崎に伝わる、1675年の島谷調査隊による無人島地図の写本のひとつ。林子平はこうした地図をもとに、『三国通覧図説』の「無人嶋大小八十餘山之図」(図4)を作成した。本図では上方を西としているが、林子平の図との比較のために北を上にした。父島の二見湾は北西向きに開口している。

なお、この地図を見ると、現在の父島、二見湾の向きに特徴がある。二見湾はじっさいは西に開口しているが、長崎に複数伝わる島谷系の地図（写本）では、二見湾が北西に開口している（図5）。ところが林の地図では、これが真北に向かって開口しているのである。この特徴は、後年に至るまで忠実に継承されることとなった。

1. 林子平の小笠原紹介

では、林子平は『三国通覧図説』で、小笠原についてどのような紹介を試みたのであろうか。

国立国会図書館デジタルコレクションにアクセスすると、見開き 58 コマ（116 ページ）の本文は、朝鮮に始まり、琉球、アイヌの順に記載が進められている。53 コマ目の左ページから始まるその最後部分が、小笠原に関する記述である。概要を見ていこう。

林は冒頭で、「この嶋（島）は本名が小笠原嶋なのだが、みなが無人嶋と称するためそれに従う」と、小笠原貞頼発見説を認めている。小笠原嶋と名付けたのは、200 年前のマジェランが発見した新天地をマジェラン海峡と命名したようなものであると補足している。

次に林は、伊豆下田、伊豆の島々から無人嶋までの距離を紹介している。八丈から北の無人嶋まで 180 里、南の無人嶋まで 200 里としている（小笠原貞頼発見説起源の情報では、これは 100 里となっていた）。

黒潮に言及した後、林は小笠原諸島が全部で 89 島あるなかで「大嶋二。中嶋四。小嶋四」の十嶋は土地が広く草木多くところどころ平地があつて人が居住することができるが、残り七十余嶋は岩の険しい小島なので人が居住することができない。しかしこれらの島で産物を探ることができる、とする。暖地であるため、雑穀や芋の栽培が可能なか、ナンキンハゼからの採蠟、漁猟の可能性を述べる。

これに続き、植物、鳥類、岩石、海産物の紹介をしている。さらに、延宝調査の概要を紹介しているが、「ここに記すところは彼の嶋谷家の記録に拠るものなり」と述べるように、延宝の島谷調査隊の（いずれかの）報告からの部分引用である。

ここで林は「私按ずるに」と自説を 2 点、述べている。ひとつは黒潮について。延宝調査隊がこれについて述べていないのは、流れが穏やかな季節の航海であったからと考察している。もうひとつは、現在無人ではあるが温暖な気候の小笠原への、植民の可能性への言及である。全部で八十余りある島のうち、規模の大きな十島に植民し年一度の船で産物を輸送すれば巨利を上げられるとする。

ここで林は、こうした考えが長崎でフェイト（Feith, Arend Willem, 1745-1782）と意見交換をした結果、もたらされたものであると述べている。すなわち、ヒュプネル『ゼオグ

ラヒー』に小笠原がウーストエーランドと記載されていて、荒地の島という意味であること。しかし草木も茂っており、日本が植民をすれば利益が上がるであろうこと。遠隔のオランダから会社を興しても利益にはならないこと。こうしたフェイトの見解に、林は共感したのであった。

2. 林子平の小笠原地図とウーストエーランド

さてここで、林子平が『三国通覧図説』に収めた地図に目を転じよう。小笠原に関連する地図は2葉あり、三か国と日本を掲載した全体図を「三国通覧輿地路程全図」(図6)、小笠原諸島のみを拡大図を前記したように「無人嶋大小八十余山之図」と称している。

全体図である「輿地路程全図」の日本図部分が、1754年に森幸安が刊行した「日本分野図」(図7)にたいへん似ていることを、ここで指摘しておこう。そればかりか、林子平の地図よりも30年以上前のこの地図には「小笠原嶋、一名無人嶋」の記載があることは注目に値する(図8に拡大図を示した)(注36)。

現在の小笠原諸島の名称は、延宝3(1675)年に発見されてから明治3年に「小笠原」と改称されるまで、およそ200年近くにわたって「無人島」が正式名称だった(平野、2001)とされる一方で、1735年に小笠原貞任が重追放になって19年後の時点で、小笠原を自称した一門による申し立てがこのような形で社会的に認知されていたのである。小笠原諸島に対するこうしたパブリックイメージは、従来の研究で見落とされていた可能性がある(注37)。いずれにしても、林の「路程全図」は、周辺国を含めて一葉にまとめた点にオリジナリティがあるが、「無人嶋・本名小笠原嶋」に関しては、先行する「日本分野図」の記述と大差はないと言わざるをえない。もうひとつ、両図の共通点は、小笠原を異様に大きく地図上に描いたことである。これは明らかに、小笠原貞任系の荒唐無稽な咄に基づくものだが、林を含めた当時の人びとの小笠原への関心を投影したものと言えよう。後に1817年の論文でこの轍を踏んだレミュザは、Klaproth(1826)の批判を受けている。とはいえ、Klaproth(1832)の完訳フランス語版『三国通覧図説』に収められたMOU-NIN SIMAのサイズも、それほど小さいようには見えない(図9)。こうした誤解は、1827年に小笠原に來航した英艦ブロッサム号の測量結果の普及につれて、徐々に修正されていくことになる。

なお三好・小野田(2014、p.39)は、森の「日本分野図」の識語から、本図は摂津の国の画工橋守国所有の日本図を修正して作成したものと紹介し、後年、一時代を画した長久保赤水(初版1779)「改正日本輿地路程全図」も、この図に多くをならったとしている。この「改正赤水図」(図10)は、『三国通覧図説』を欧州にもたらしたオランダ商館長ティツィング Titsingh Isaac(1745-1812、委細は下記)がやはり持ち帰っている。これをシー

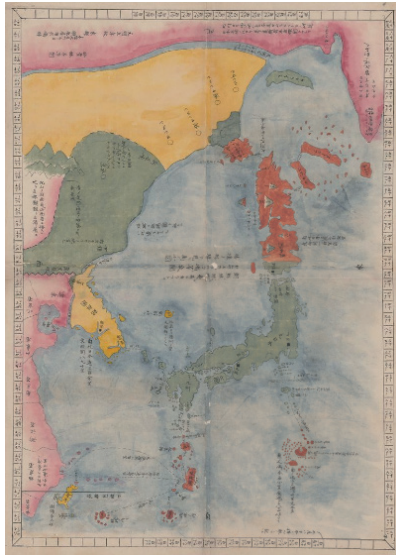


図6 『三国通覧輿地路程全図』（林、1786）

横浜市立大学所蔵の古地図データベースによる。

http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~yacu-rare/pages/WC-1_26.html（最終閲覧日：2020年3月20日）

図4とともに『三国通覧図説』に添付された。従来の地図が日本図か万国図のいずれかだったのに対し、日本と周辺国との関係を示した点に新味がある。小笠原諸島は緑系の内地および伊豆諸島と異なり、蝦夷地、琉球国と似た、赤系の着色がされている。先行する「日本分野図」（森、1754、図7）同様に、小笠原を大きく描いている。父島は房総半島よりも大きい。

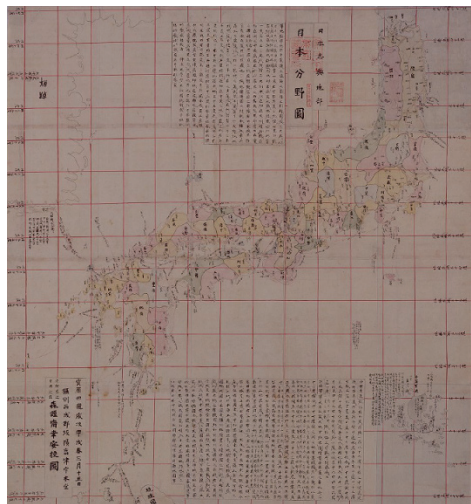


図7 「日本志輿地部 日本分野図」（森、1752、本図は森、1754による）

国立公文書館蔵、国際日本文化研究センター森 幸安データベースによる。

http://sekiei.nichibun.ac.jp/MOR/ja/detail/?group_h=220（最終閲覧日：2020年3月20日）

経緯線が初めて入った日本の地図として知られる。房総半島の真南に、巨大な小笠原諸島を丸い島々と描き、詳細な解説をつけている。小笠原宮内貞任の重追放から十数年後に刊行されたこの地図には、田中（1993）が指摘するように、小笠原貞頼発見伝説の影響が tydよく認められる。

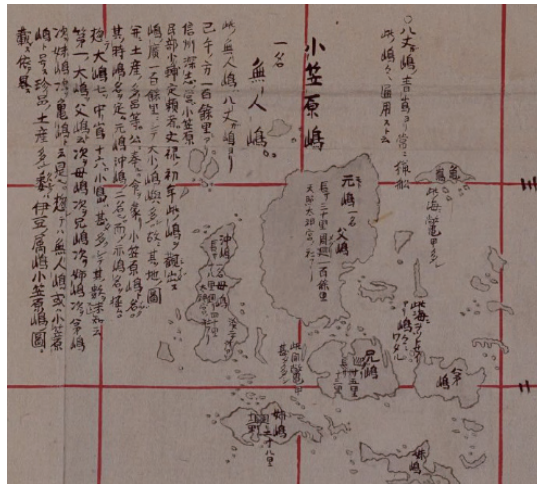


図 8 森 (1752) に描かれた小笠原諸島

図 7 の部分拡大。「オットセイ」が海を渡る等の記述は全面的に小笠原貞頼発見伝説に拠っており、1675 年の幕府調査隊への言及は皆無である。延島 (2011) が指摘したように、ファミリー系の命名は想像の産物にほかならないとはいえ、小笠原諸島に対する 18 世紀半ばの日本の人びとの関心の高さを見ることができる。「小笠原嶋 一名 無人嶋」は、30 年あまり後の林子平のキャプション「無人嶋・・・本名小笠原嶋と云」を想起させる。

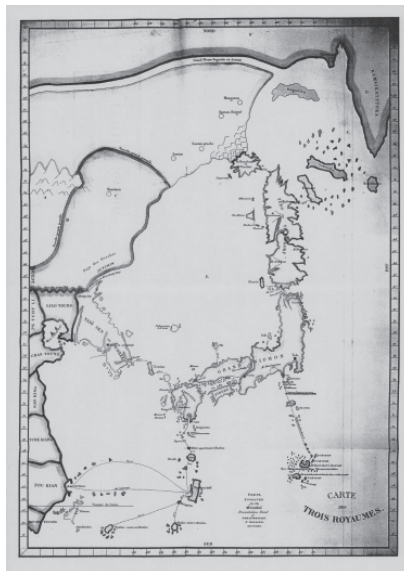


図 9 「三王国図」(Klapproth, 1832)

Klapproth (1832) の付図。すでに 1830 年代に入っていたが、『三国通覽輿地路程全図』(図 6) を忠実に紹介したため、北海道が異様な姿のままとなっている。小笠原は相変わらず大きく、1827 年の英艦プロッサム号による測量の成果は反映されていない。

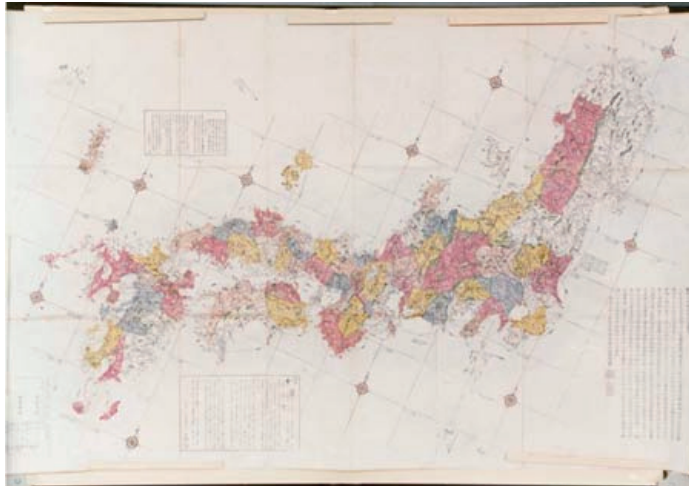


図 10 『改正日本輿地路程全図』（長久保、1779）

国土地理院古地図コレクションによる。

<https://kochizu.gsi.go.jp/items/139>（最終閲覧日：2020年3月20日）

実測図ではないものの完成度が高く、経緯線もあったことから1779年の初版から長期にわたって影響が大きかった。蝦夷地を含んでいないのは森（1752、1754）と同様だが、小笠原も除外されている。本図は、1840年刊行の第五版。

ポルトが「日本原図」と呼び、とくに経緯線のあったことから19世紀前半までのヨーロッパで重要視されていた（馬場、2001）。ただし、この「改正赤水図」はケンペルが持ち帰った「新撰大日本図鑑」同様、八丈までで終わっている。林の「輿地路程全図」はこれら日本地図の主流にかなり近く、従って信頼性の高い地図と見なされた可能性がある。

林子平が小笠原諸島を拡大して取り出した「無人嶋大小八十余山之図」に書き込まれた説明を見てみよう。父島らしき島近くに「北ノ嶋ト云廻り十五里。又本嶋トモ云」とあり、その右、やや兄島に近い所に「此嶋ヲ和蘭ノ書にウーストエーランドト云」とあって、その右に（荒地）（島なり）と振ってある。片桐（1997）に長崎のオランダ通詞が作成した単語帳が集成されていたので、これを参照したところ、eilandが島とはすぐにわかった一方、荒地と訳されたウーストに対応するオランダ語が分かりづらかった。一見したところ、英語のwasteにも似ている。しかもこの地図では画面の東方に描かれているため、oost（東）の可能性も否定できないと思われた。

戦前の日本に英国海軍武官として駐在したBoxer（1936）が著した、江戸時代の在日オランダ商人に関する図書の中で、ウースト・エーランドは複数形のWoeste Eilandenとなっている。woesteは現代オランダ語では形容詞で「凶暴な」とある。江戸時代はどうだったのだろう。片桐（1997）が校訂した上記単語集には、このwoesteなる語彙は含ま

れていなかった(注38)。林の記述がエーランドと単数表記になっているところをみると、江戸時代の日本人に単数・複数の区別は難しかったのかもしれない。航海者に、荒涼たる印象を与えたかのような命名であるが、いずれにしても林子平のいう「此嶋」は、小笠原諸島全体を指すことが明らかになった。とはいえ、「和蘭ノ書」の著者であるドイツ人 Johann Hubner がどういう情報に基づいてその著“Geographie”に小笠原のことを記載したのか、そこに何を書いたのか、各国語に翻訳されて版を重ねた『ゼオガラヒー』の小笠原についての記載がなぜ、ヨーロッパ社会に影響を及ぼした気配がないのか、明らかでない。これらの解明については、今後の課題としたい。

なお、林子平『三国通覧図説』の小笠原に関する記事は、Boninを生んだ直接の情報源とされながら、近年翻刻されたものを見ないようなので、カタカナをひらがなに変えるなどいくぶん読みやすくしたものを、末尾に附録としておいた。

V. 19世紀の小笠原理解に与えた林子平『三国通覧図説』の影響

江戸時代に長崎出島のオランダ商館長だった上記ティツィング Titsingh, Isaac は、アムステルダム出身で、オランダ最初の日本学者とされる。オランダ商館長として1779年、1781年、1784年の3度来日し、蘭学に関心を寄せる大名、蘭学者らと交流を深めた。大の日本びいきとして知られ、1784年にバタビアに戻った翌年からベンガル長官、駐清オランダ大使の要職を歴任した。ただ彼が清・乾隆帝の万寿節(誕生日)祝賀の使節を1795年1月に終えたとき、オランダにはフランス軍が入り、国王ウィルム五世はイギリスに亡命していた。そこでティツィングは1796年12月にまずロンドンに入り、1801年に一時オランダに帰国したあとパリに移住して、1812年2月に没するまでの晩年をパリで暮らした。この間、クラブロート、レミュザら著名な東洋学者と交流があった。遺著に、『日本風俗図誌』として知られている、レミュザが編集・刊行した *Mémoires et anecdotes sur la dynastie des régnante des Djogouns, souverains du Japon* (Titsingh, 1820) 等がある。

ティツィングは1786年に林子平『三国通覧図説』が出るとこれをバタビアに取り寄せ、翻訳をつけていた。これが没後レミュザの手に渡り、小笠原を Bo-nin とする1817年の論文の材料となった。

1. レミュザとクラブロートによる小笠原紹介

レミュザ Jean-Pierre Abel Rémusat (1788-1832) については、すでに度々言及してきた。彼は独学で中国語を修得し、コレージュ・ド・フランスで、ヨーロッパ最初の中国語・文学講座を担当し、『アジア学報』を創刊するなど、ヨーロッパ中国学の黎明期に、確固たる

基盤を築き上げた天才と、高田（1996）は評している。高田はまた、クラブロート Julius Heinrich Klaproth（1783-1835）については、若くして東洋諸語にとりつかれ、シベリア・コーカサスの調査に従事し、その卓越した言語能力によって中国のみならず広くアジア全域を研究し、レミュザとともにフランス中国学の全盛をもたらした人物と評価する。たまたまパリを活躍の舞台とした二人は、林子平『三国通覧図説』を入手してその理解にそれぞれの説を発揮した。レミュザが所有した『三国通覧図説』はティツィングの旧蔵書であると、レミュザ自身が明かしている（ドベルグ、1989、p.78）。

クラブロートが旧蔵していた『三国通覧図説』については、彼の経歴とからめてイルクーツク（類書にヤクーツクとするものもあるが、これは誤り）に行った時に日本語学校で入手したとの説がある（注 39）。大黒屋光太夫の神昌丸の乗組員であった新蔵からの入手とする説もあり、大変ロマンチックな物語といえる。しかし、伊勢から江戸に向かう米運搬船の乗組員がこの本を携えていたとは考えがたい。しかも神昌丸の遭難は 1783 年で、『三国通覧図説』の刊行よりも 3 年早いのである。かりにイルクーツクの学校の図書であったなら、蔵書印か何かがありそうだが、ドベルグが検討を加えたパリ国立図書館のクラブロート旧蔵書にそうした痕跡があったとは報告されていない。ここはやはり、クラブロートがパリで交流のあったティツィング経由で入手したと考えるのが順当であろう（注 40）。

ところで Klaproth（1826）は、何を根拠にして、無人を MOU-NIN と読んだのだろうか。イルクーツクで出会った新蔵は、「漢字についての知識は極めて貧弱だったが、1776 年版の『早引節用集』という日本語の辞書を持っており、クラブロートはその辞書と新蔵の知識を借りて『三国通覧図説』を読むことが出来たとの興味深い指摘を、松尾（2014、pp.116-117）が行っている。『節用集』はこんにちの辞書と異なり、漢字および熟語の読みを示しただけの「字書」とよぶべき図書である。調査の結果、『早引節用集』の 1776 年版（渋川、1994）には、「無人」の見出し語が含まれていないことが分かった（注 41）。となると、日本語に慣れないパリの東洋学者が、日本語の文献を根拠として MOU-NIN と綴った可能性は、低そうである。となると、本稿の冒頭で紹介したような南方の中国語方言に関するクラブロートの知識が援用された可能性を指摘できるかもしれない。いずれにしても重要なのは、二人にとっては、漢字熟語の日本語読みを明らかにすることが問題であり、耳から聞こえた発音をどう綴るかという事ではなかったという点である。

さて、レミュザが 1817 年に発表した論文（Rémusat, 1817、以下 17 年論文）では、本文中、添付の地図ともにハイフンつきの Bo-nin の綴りを使用していた。翌年の英語版を筆者は参照出来なかったのが、英語版レミュザ論文でのハイフンの有無は未確認である。というのも、言語学者ダニエル・ロング教授は、ハイフンの有無で発音が変化する可能性を

指摘された（2020年3月18日の教示による）。クラブロート（注42）は1826年になって、やはり『三国通覧図説』に基づき、レミュザの所説を批判しつつ『アジア論叢』に無人島の記事を紹介した（大熊、1985、p.31、注43）。ほかの三国に先駆けた紹介は、地球上の空白地帯への関心のなせるわざであっただろう。

クラブロートの批判に応えようとしたレミュザの1829年論文（Rémusat, 1829、以下29年論文）については、すでに福井（1983）が見出していたことを前記したが、改めて確認したところレミュザはこの時、17年論文と異なり、本文中でBo-ninとBou-ninを併用していることが分かった（注44）。クラブロートの指摘を受けてのことと思われる。

両論文ともに地図が添えられており、それには「無人嶋」と手書きで書き込まれている。しかし、書体が異なっている。類書の図版と異なり17年論文では漢字「無人島」のみだったが（図11）、29年論文では福井が指摘したように「ブニンシマ」のふりがなが振られている（図12、13）。本文にBou-nin表記を追加したことも、これと関係がありそうである。比較のため、林子平の小笠原地図の表題部分も示しておこう（図14）。あえて推測するならば、レミュザは「無人」にBo-ninをあてたとき、ブニンと読み、また読ませなかったのではなかろうか。この読みを強調するために29年論文でBou-ninも併用した。ただし、江戸時代の日本人の実際の読みについて、彼が知識を得ていたか即断できない。現代と異なり、

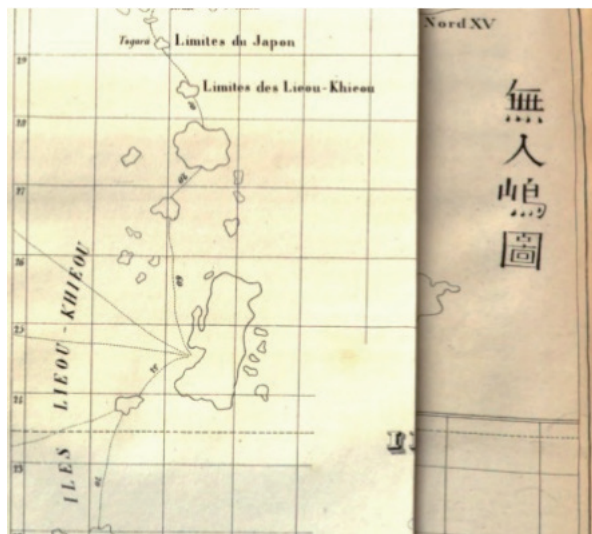


図11 Rémusat（1817）の巻末地図の標題部分

<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=nyp.33433108120563&view=1up&seq=394>による（最終閲覧日：2020年3月20日）。

折りたたまれた状態でスキャンされた。「嶋」の9画目の横棒を欠くのは林子平の地図（図14）の標題二行目と共通。ただし林が横一棒としたところは、四つ点である。また「図」が正字の「圖」となっている。

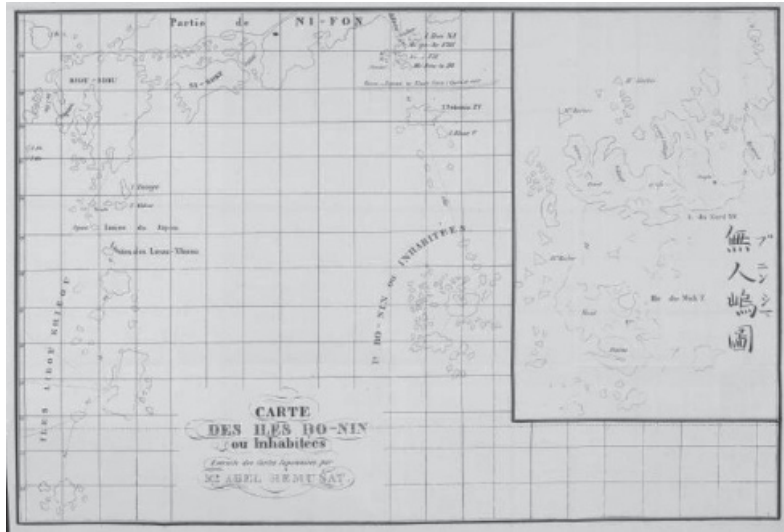


図 12 Rémusat (1829) の無人島地図 (全体図)

オーストリア国立図書館所蔵本による (Google Books 所載)。

日本の北半分は省略された。英艦プロッサム号による小笠原測量は 1827 年だったが、小笠原諸島は依然、大変な大きさである。福井 (1983) が指摘したように、ブニンシマのふりがながある。ただし標題は BO-NIN であり、BOU-NIN ではない。

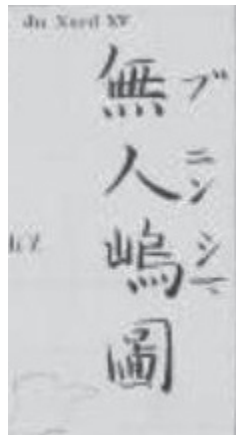


図 13 Rémusat (1829) の無人島地図の標題部分 (図 12 の部分拡大)

Rémusat (1817) と比較すると、追加されたカタカナのふりがなの他に、漢字の書体が変わっていることに気づく。「嶋」の、こんどは七画目が欠落している。

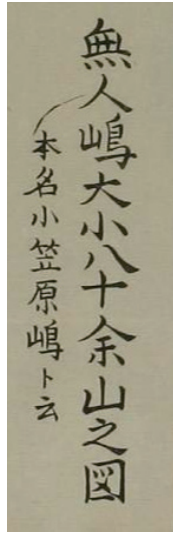


図 14 図 6 の標題部分（拡大図）

「嶋」の 11～14 画目は横棒で表現されている。「図」は略字。左の嶋は、横一画を欠いていることに注意。これがレミュザに受け継がれた。

ムニンの読みが江戸時代には一般で、ブニンは特殊な意味合いでのみ使われていたことは、レミュザには理解されていなかったと考えてよいのではないだろうか。

しかし、レミュザが論文に添付した地図の表題は 17 年論文、29 年論文ともに CARTE DES ILES BO-NIN ou Inhabittees すなわち「Bo-nin もしくは人が住んでいない諸島図」であった。前者、17 年論文の付図からロンドンの地図業者で英国海軍御用達だったアロウスミスがハイフンのない Bonin を採用したため、この語が定着したと考えられる（図 15、16）。

ところで、クラブロートは 1826 年論文の末尾で、このアロウスミスについて「地図の製作に従事している人々の内では最も無知な人である」（大熊 1985、p.37）と、口を極めて酷評している。「かれはアベル・レミュザ氏によって発刊された模写の図面に心を奪われた。そして、かれはその四葉つづきの大判で 1818 年に完成し、さらに 1822 年に改訂出版したその「アジア地図集」にそのコピー（模写）を加えている。このようにして、これらの諸島は、実際はそうでないのに三倍ほどの大きさに表現されている。」と出版の経過を述べつつ批判を加えている。クラブロートはアジア地図についてのみ言及しているが、私には 1820 年の太平洋海図の方が、航海者への影響が直接に大であったと思われる。いかがであろうか。

クラブロートは激しい人であったらしく、高田（1996、p.32）は「唯一、彼の批判を免



図 15 アロウスマスによる太平洋の海図（1820年）

Barry Lawrence Ruderman Antique Maps Inc. による。

<https://www.raremaps.com/gallery/detail/41296hc/chart-of-the-pacific-ocean-arrowsmith>（最終閲覧日：2020年3月20日）

アロウスマスは英国海軍御用達をつとめる地図・海図業者の老舗である。全体9葉あるうちの、本図は日本周辺部分のみを示す。北海道の形状が実際に近づいている。小笠原は、房総半島の南、琉球の東の北緯26～27度、東経141～142度あたりに大きく描かれている。島々の分布域は、四国の面積に匹敵する。



図 16 図 15 の小笠原部分拡大図

小笠原にハワイから最初の入植者が到達する10年前、小笠原がまだ無住だった時代に、Bonin Islandsの名称が有力な海図に印刷されていたことを示す。Communicated by M. Abel Remusat from Japanese Authorityと、フランスの協会等々の会員であるレミュザの日本情報に準拠したことを明記している。父島の二見湾が真北に開口し、父島、母島が単に「北島」、「南島」とあるのは、林子平の「北ノ嶋」「南ノ嶋」の踏襲。硫黄島、南硫黄島近くを通っている2本の線は、過去の航跡である。すなわち、Bonin Islandsに到達した船舶がなかったことも、この海図は示している。



図 17 John William Norie の A New Chart of The Pacific Ocean (新太平洋海図、1836 年)

Barry Lawrence Ruderman Antique Maps Inc. による。

<https://www.raremaps.com/gallery/detail/56007/pacific-whaling-a-new-chart-of-the-pacific-ocean-exhibiti-norie> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)

Norie もまた、ロンドンの地図業者。2 葉のうち 1 葉のみ (北緯 12 度以北部分) を掲げた。アロウスミスが採用した Bonin を継承している。つまりここから、Bonin の名称の定着ぶりを看取できる。

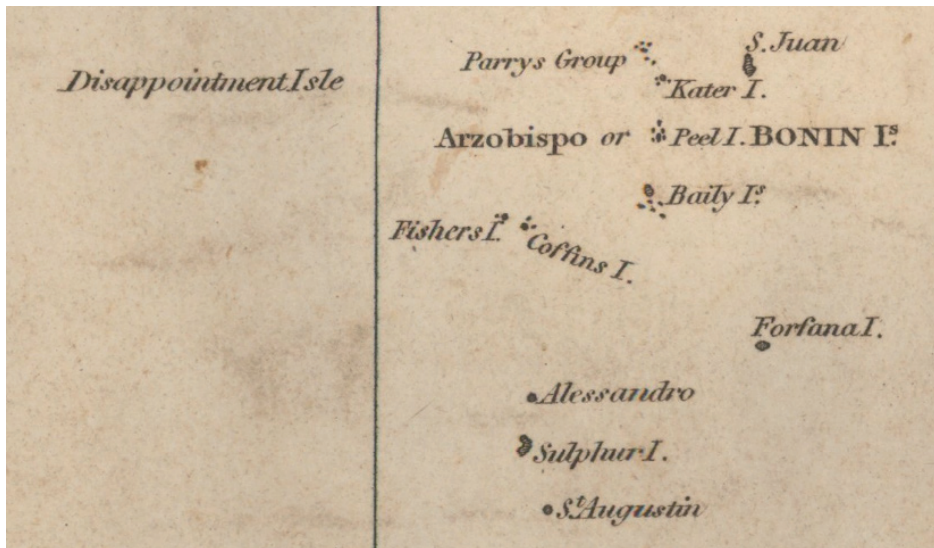


図 18 図 17 の小笠原周辺部分 (拡大図)

北は聳島列島のケータ (Kater Island) から南は南硫黄島 (St. Augustine)、西は西之島 (Disappointment Island) が北緯 24 ~ 27.5 度、東経 139 ~ 143 度に散在している。森 (1754) 以来の、異様に大きな小笠原諸島はついに解消された。しかし、来航者の命名ぶんだけ島が増え、別の混乱が生じている。

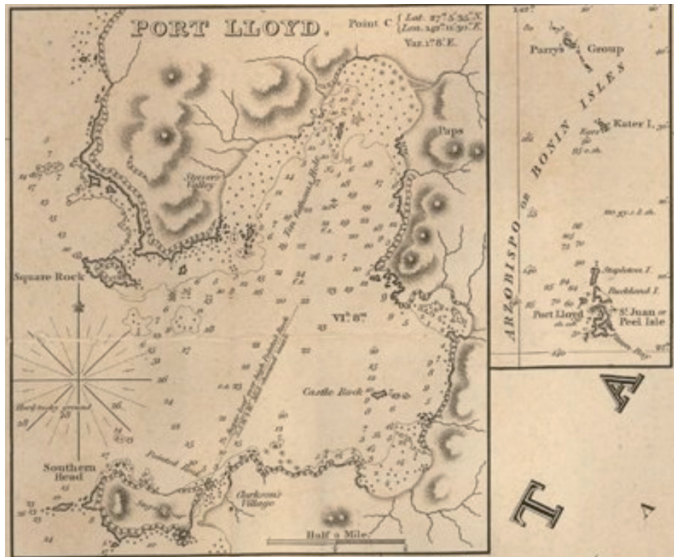


図 19 図 17 の標題下に挿入された Port Lloyd 二見湾と Bonin 諸島の詳細図

太平洋海図左上の標題直下にこの挿図が置かれており、小笠原への関心の高さをうかがわせる。父島の二見湾が、地図上ではじめて西に開口した。烏帽子岩は Square Rock。要岩は Castle Rock。大村の位置に Staver's Valley、洲崎に Clarkson's Village の名がある。その沖の野羊山には名称がないが、その後削平された飯盛山は Sugar Loaf（割って使用する盛り固め砂糖）となっている。1827 年の英艦プロッサム号による測量の成果が反映されたと考えられる（同艦は小笠原来航に先立ち琉球に廻航し、伊江島の城山にもシュガーローフと命名している）。ただし、プロッサム号『航海記』（Beechey, 1831）には、これらの図は掲載されていない。翌年、Carey & Lea 社から刊行された版は未調査のため、今後の課題のひとつである。

れたのはレミュザくらい」と述べている。自分が納得していない読み方を鵜呑みにしたうえ、巨大な小笠原島を海図に印刷して世に広めたアロウスミスのことを、よほど不快に思っていたようである。

その後、1832 年になってクラブロートは『三国通覧図説』の全訳を発表した（注 45）。その添付地図には、英国東洋翻訳基金のために版が刻まれた（engraved）と断り書きがあり興味深い。というのは、これに先立つ 1827 年に英国海軍の測量艦プロッサム号が小笠原に来航して、1831 年にはその航海記を、ビーチー艦長 Capt. Frederick William Beechey（1796-1856）が公刊しているからである。地球上のフロンティアへの列強のまなざしを感じさせる。

その後も状況は進展した。レミュザに数年遅れてクラブロートが没した翌年の 1836 年に、ロンドンの新興地図業者 Norie が出版した新太平洋海図（図 17、18）が、アロウスミス同様 Bonin Islands を継承したのは重要である。しかも、小笠原に来航した諸艦船による、島々に対する個別の命名を反映したため、島の数が実際よりも増えている（図 18）。



図 20 アロウスマスのアジア地図 (1844 年)

David Rumsey Historical Map Collection による。

<https://www.davidrumsey.com/luna/servlet/workspace/handleMediaPlayer?lunaMediaId=RUMSEY~8~1~2742~260027> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)

第一次アヘン戦争終結まもなくの出版。英国政府は、戦況いかんによっては小笠原を香港の英人居留民の避難先として考えていたとの説がある。

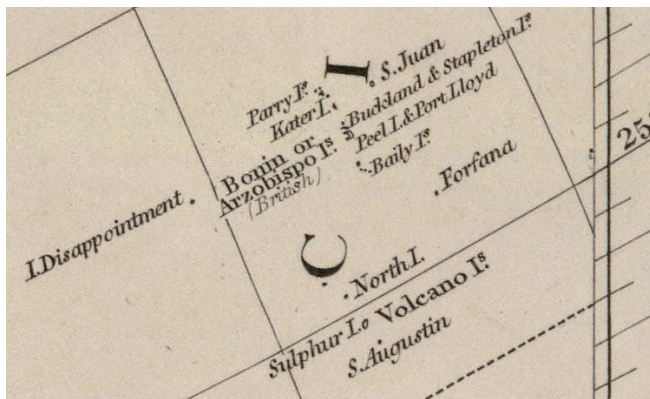


図 21 図 20 の小笠原部分拡大図

Norie による 1836 年の海図刊行 (図 17 ~ 19) から 8 年後、改めて小笠原を見ると島数が減り、すっきりしている。驚くべきは Bonin または Arzobispo 諸島とある下に (British) = 英国領と印刷されていることである。類書は、日米修好通商条約の批准書交換のため万延元 (1860) 年にワシントンに行った遣米使節が、地図上で小笠原が英国領とされ、外国人が居住していると知って驚き、帰国後、小笠原諸島 (“無人島”) が日本領であることを国際的に明確にすべきと上申したことを伝えるが (たとえば大熊、1969)、英国海軍御用達業者の地図がアヘン戦争後まもない時期に小笠原を英国領と認定していたことは、同時代の日本人にはもちろん知られていなかったし、研究的にも従来指摘されていなかった。ナサニエル・セーボレーら初代の入植がじつは駐ハワイ英国領事のあっせんだったこと背景もふくめ、研究の余地がある。



図 22 「東海道之図」(瓜生、1874 の口絵による)

明治初期の地理教科書。図 1 から四半世紀を経て、翌年には「小笠原再回収」となる明治 7 年になってもまだ、日本国内では小笠原諸島が伊豆半島より大きく、父島の二見湾が北向きに開口した『三国通覧図説』いらいの認識であった。幕末文久元年の水野調査隊の成果が普及しなかったことが分かる。本文中では次のように述べている。

「また八丈の正南には遠く隔てて大洋の中に小笠原嶋ありて一名(めう)無人島(むにんしま)といふ島の数々九十四其内最も大なるは父島母島兄弟姉嶋妹・・・(下略)」。かつて林子平が 89 とした島の数が、やや増えた。理由は分からない。

加えて、父島・二見湾の詳細な取り出し地図が標題下を飾っているのは注目すべきことと思われる(図 19)。

さらに 1842 年のアロウスミス(甥に代替わりしている)のアジア図(図 20、21)に示された Bonin 諸島は、極端にふくれて二見湾が北を向いていた林子平起源の旧弊が補正され、現在の地図にほぼ近づいている(注 46)。ペリーの来航よりも 10 年以上も前のこの時期に、西欧は、ここまで正確な小笠原の情報を共有していたのである。ここで改めて図 1 をご覧いただきたいのだが、林子平が作成した小笠原図の直系の子孫とも見えるこの地図の刊行は、これまで見てきたロンドンの海図・地図類よりも新しく、1848 年である。その更に四半世紀後、明治時代になっても、小笠原「再回収」前夜の国内における小笠原情報は旧態依然としたものであった(図 22)。

VI. おわりに

Bonin という命名にかかわって、辞書編纂者の理解、日本語・中国語の読み、転訛説・非転訛説と点検し、これまで注意が払われることが少なかった日・欧の文化交渉史の観点から、先行研究に必要な訂正を加えつつ、史料を時代順に整理した。そこで、「鎖国」日本から将来された一書に地図とともに掲載されていた、北西太平洋に分布する未知の島々への日本人による理解、およびその漢字による名づけ、「無人島」をどう読むかが19世紀初めの欧州の学者の関心となったことが分かった。とくに地図（海図）に示された小笠原が、Bonin という名づけに大きく貢献したことを見た。

そこで明らかになったのは、小笠原に関する情報が二度にわたり海を越えてヨーロッパに渡ったことである。初回はケンペル『日本誌』、二回目が林子平『三国通覧図説』である（もちろん、この後に長崎オランダ商館に赴任したドイツ人医師シーボルトが控えている。彼はムニンを主張したのだが、すでに確定したボニンの綴りを変更させることができなかったのも、本稿の考察対象からは除外した）。ケンペルと林子平の間に、小笠原諸島を「ウースト・エイランデン＝荒地嶋」とするいかなる情報が地理書著者のドイツ人の元に届けられたかについては、別に調査の機会を持ちたいと思う。

林子平の発禁本、『三国通覧図説』のヨーロッパへの招来が、パリでBo-ninという綴りを生んだ。この綴りがロンドンでBoninとなり、学者の議論を超えて社会に普及・浸透したわけだが、それにあたって最大の要因は地図・海図というビジュアルの力であったと考えられる。19世紀に入ってもいまだ知られていない海域に位置し、じつは林子平も、レミュザもクラブロートも見たことのない島ゆえに、さまざまな想像をかき立てたのだろう。英国艦の測量が入って島の実際のすがたが解明され、定住がはじまり、小笠原が既知の領域に組み込まれると、時代は次のステージに入る。

Bo-nin がなぜ Bonin となったのか。これについて、最後にひとつだけ考察を追加しておきたい。従来の研究では指摘されていないことだが、ハイフンのない Bonin は、欧米人にとっては姓のひとつだったということである（注47）。ロンドンの地図業者がハイフンつきの Bo-nin だったものを Bonin と綴った背景には、これが欧米人にとって聞き覚えのある名辞だったという可能性を否定できない。さらに言えば、当時の人びとが小笠原諸島のことを Bonin 氏の発見にかかる、または、Bonin 氏に献名された島々と誤解した可能性も、皆無とは言えない。

調査を通じて、未知なる島々の情報が舶載され、さまざまな議論を生んだこと、最初は古地図の引き写しにすぎなかった地図・海図が、次第に更改されていくようすを目の当た

りにした。これに比較すると、日本の小笠原地図は旧来のままで、『三国通覧図説』添付図の流れを汲む小笠原地図は、明治に入ってから刊行されつづけた（注48）。東洋ならではの、祖述の学の伝統を垣間見る思いである。調査の過程で筆者が出会ってつよく共感を覚えた一節を最後に紹介して、稿を閉じたい。

「『海図は生き物である』この言葉を、私は、海上保安庁水路部の方からご教示いただいた。そのいうところは、海図は航海者からの情報を集積し、それに基づいてくりかえし新しい情報を表すよう改訂が加えられ、深化していく地図である、と理解する。」横山（2001、p.271）

謝辞

本稿は、勤務校である和光大学から与えられた一年間のサバティカル（学外研究）の成果の一環です。この機会を与えられた同僚各位に感謝申し上げます。私の、小笠原に対するそもそもの関心を啓いたのが、和光大学市民大学講座ばいでいあの受講生、遊佐遼子さん（元、小笠原中学校教諭）でした。まだ見ぬ世界に対する私の関心を受け止め、首都大学東京の客員研究員への道を開いてくださった首都大学東京教授（当時）可知直毅先生、直接の受入教員をお引き受けいただいた沼田真也先生および小笠原研究委員会に感謝します。編集担当の松山 洋先生には、たいへん行き届いた閲読とアドバイスを頂戴しました。小笠原地域史の先学、延島冬生氏には、資料のご提供とかずかずの教示をいただきました。安井隆弥先生（元、小笠原高校教諭）にも、貴重な資料をご提供いただきました。ほかにお名前は挙げませんが、島の多くの方にあたたかく見守っていただきました。長崎県立大学の松尾晋一先生および島原本光寺の片山弘賢住職に島谷系地図の転載を快諾していただいたおかげで、父島二見湾の向きに特色がある林子平図の直接の影響を明確にできました。小笠原村父島という遠隔地にあつての文献調査は、図書館司書の手助けなしには難しいことでした。瀧 桂子さん・宇佐美奈央さん（和光大学図書・情報館）、鈴木 都さん（西尾市岩瀬文庫）、馬場 郁さん（コレージュ・ド・フランス図書館）、古市直子さん（東京都健康安全研究センター図書室）のたいへん有益な情報提供に、また、月々の都立図書館所蔵図書の取り寄せでお世話になった小笠原村地域福祉センター図書室のスタッフ各位に、あつく御礼申し上げます。最後に、小笠原研究の先達で「ことば」の専門家ダニエル・ロング教授との出会いに感謝します。おたがいに十年ぶりのサバティカルでした。半年間を小笠原研究施設でご一緒し、研究のこと、島のことなど日常的にさまざまなアドバイス～時にはセミナーと呼びたくなるものもふくめ～を得られたことは、私にとって贅沢すぎる幸運で

した。

小笠原に関する先行研究を渉獵して、先学によく啓発された一方で、間違いが多く含まれていることに気づきました。なるべくそうならないことを願うばかりですが、本稿にもし間違いがあれば、私の責任です。ご指摘をいただければ幸いです。

附録 林子平『三国通覧図説』から小笠原の条

「無人嶋 地図は別に一枚に作って此の巻に附く

この嶋本名小笠原嶋と云ども世挙げて無人嶋と称する故、称に随って無人嶋と表するなり。小笠原嶋と名づけしことは昔時小笠原某此の嶋を見出して地図を持ち帰りし故、名付けしなり。○二百年前、イタリア人メガラニユスという者南方に新世界を見つけたるを直ちにメガラニカと名付けたるが如し。(ポルトガル人マジェランが率いたスペイン艦隊による、1520年のマジェラン海峡の発見・命名を指している。訳者)

無人嶋は伊豆の辰巳二百七十里にあり。○伊豆国下田より三宅島へ十三里○三宅嶋より新嶋へ七里○新嶋より三倉嶋へ五里○三倉嶋より八丈嶋へ四十一里○八丈より北の無人嶋へおよそ百八十里。南の無人嶋へ二百里

八丈より無人嶋へ渡る洋中に五嶋あれどもただ一大石山にして産物なし

三倉嶋より八丈嶋へ渡る洋中に黒瀬川と云て急流の瀬あり舟人の難所とするところなり。図を見て知るべし

嶋々大小すべて八十九山ありその中、大嶋二。中嶋四。小嶋四。この十嶋は土地広く草木多くところどころ平地ありて人居住すべし。その余七十余嶋は岩石嶮峻の小嶋なる故に人居住することあたわず。ただ産物を探るべし(「べし」は、適當(のがよろしかろう)および可能(ことができる)の意。訳者)

此の嶋二十七度の暖地なる故に山嶺潤谷といえどもなお菽麦梁稗蕃藷等を植うべしまたナンキンハゼを植えて蠟を得べし又漁獵に珍を得べし

此の嶋に産する草木及び諸物下に記す。しかれども獸類は絶えて無しと云えり○木には根本にてひとかかえばかり有りて高きこと三十余尋の堅木あり。これ珍とすべし。又棕櫚に似てはなはだ高き木あり。ヤシ樹、栴榔木、白欒子、カチヤンの木、梅檀樹、榎木、楠木、山柿、藤の葉に似たる大木、桂樹、桑木等なり○草には山帰来、当帰に似たる草、丸葉の牽牛花等なり○鳥にはインコに似たる鳥、五位鷺に似たる鳥、バンに似たる鳥、白鷗に似て大きき三尺余りの鷗等なり。すべて此の島の鳥はみな徒手にして捕えらるると云えり○石には明礬、緑礬、五色石、菊面石このほか異石多し○海産には鯨魚、大海老、大牡蠣、海胆等也。右のほか産品なお多し

此の無人嶋は延宝三年肥前国長崎に於いて唐船仕立ての船を造営ありて其の船を伊豆国へ廻し長崎の住人島谷市左衛門、中尾庄左衛門嶋谷太郎左衛門（この三人は學術有て天文地理を知るもの也）江戸小網町の大工八兵衛等を首立として総人数三十余人。御印の旗を賜つて同年閏四月五日伊豆の下田を出帆しまづ八丈に至ってそれよりだんだん東南の洋中を探りてついに八十余嶋を見定め、島の大小、天度の高下、草木産物等を詳らかにして同年六月二十日再び伊豆の下田へ帰帆すと云えり。ここに記すところは彼の嶋谷家の記録に拠るものなり○私按ずるに彼の嶋谷家の記録に黒瀬川のことを言わず。黒瀬川は三倉嶋と八丈嶋との中間にあり幅二十余町有て東西百里に渡りたる大急流の黒潮なり。此の瀬を乗切ること大いに心得あることと聞き及べり然れども夏秋は此の瀬の流れ穏やかなり。冬春は大急流なりと云えり。嶋谷家の者ども無人嶋へ渡りしは閏四月初旬に下田を出帆して、同年の六月下旬同署へ帰帆する時はこの瀬の穏やかなる時節故この瀬の難所を見ずして乗り過ししと思はる。この故に記さざるか○私按ずるに彼の嶋八十余嶋の中、第一の大嶋廻り十五里なるときは壹岐の島に比すべし。その次の大島廻り十里なるときは天草嶋に比すべし。その余廻り二里以上六七里に及ぶもの八嶋有り。すべて此の十嶋は湊あり平地あり人居住すべし、五穀植うべし。且つ暖気の辺地なる故、珍異の物を産するなり。其余七十余山は岩石小嶼なれども亦小さく、物を産するなり。これに因りてひそかに工夫すれば、この嶋へ人を蒔きて樹芸を為し、村落を建立して山海の業を起し一州の産物国を仕立てて後、此の嶋渡海の常船を造りて歳に一渡海して産物を収むべし。船を造るの費は一渡海にて償うべし。是尋常商估の知らざる所なる故、後業のためにここに記すなり。願わくば好事の商估憤発して此の業を興さば巨万の利、目前にあるべし勉之勉之

安永年中小子肥前の鎮台館に遊事して崎陽に至りオランダ人ア、レントウエルレヘイトに会ふ。ヘイト其地理書ゼオガラヒーの説を談じて、日本の辰巳二百余里に嶋あり。ウースト・エーランドと名づく。ウーストは荒地、エーランドは島のこと也と語れり。又言いて曰く、此の嶋無人なれども草木多きを見れば不毛とは言ひ難し、日本より人を蒔きて一州の地となして五穀産物等を仕立ば海遠からざる故、大利あるべし。オランダよりコンハンヤ（ポルトガル語 companhia=会社、訳者注）を立てるには海遠く国小にして費にあたらざると云へり。小子ヘイトが言を然りとす。よって亦復参考のためにここに記すのみ。無人嶋略説大尾」

注

注 1 ©Shogakukan Inc.

<https://vgate.wako.ac.jp/+CSCO+1h75676763663A2F2F776E636E617861626A79727>

- 174722E70627A++/lib/display/?lid=40010RH021019000 (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 注 2 ©Shogakukan Inc.
<https://vgate.wako.ac.jp/+CSCO+1h75676763663A2F2F776E636E617861626A79727174722E70627A++/lib/display/?lid=40020PEJ0094700> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 注 3 もちろん、辞書によっては Bonin の見出し語がないもの (たとえば研究社の『ライトハウス英和辞典第 2 版』1991、三省堂の『クラウン仏和辞典第 4 版』1995) や、Bonin の見出し語はあるが、無人由来との説明をしないもの (大修館『ジーニアス英和辞典・改訂版』1994 や、Bonin Inseln を見出し語にした三修社の『独和広辞典』1987) もある。
- 注 4 佐村 (1900) 『増訂國書解題』や上田・松井 (1915-1928) 『大日本国語辞典』、物集 (1925-1926) 『廣文庫』が「むにん」の読みを採っている。
- 注 5 『國漢外語辞典』(1930) は、無人島→むじんとう (むにんたう) としている。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1080319> (626 コマ目、最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 注 6 明治初期の日本では官民ともに南京語を漢語と呼んで教育した。外務省が設置した「漢語学所」の教師は、唐通事出身者によって占められた。漢語学所が東京外国語学校となり、北京官話の教育へと切り替えるのは明治 9 (1876) 年であった。六角 (1988、p.30 および p.89)。
- 注 7 原題 *Progressive Lessons in the Chinese Spoken Language with List of Common Words and Phrases and an Appendix Containing the Laws of Tones in the Peking Dialect.*
- 注 8 塩山 (2017) による。
<https://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstream/10112/11248/1/KU-0400-20170401-18.pdf> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 注 9 詹・樋口 (1983、p.18) は、現代漢語方言を七つの大方言区に分けている。清代に海禁が解かれると、広東が対外貿易の重要な拠点となり、繁栄の一途をたどった (p.206) と、南方中国語の重要性を示唆している。
- 注 10 参照しえた地図では、BOU-NIN でなく BO-NIN となっていた。福井の記憶違いの可能性もある。
- 注 11 章末の文献に Rémusat (1829) を挙げている。

注 12 下記 URL で閲覧できる。

<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=gri.ark:/13960/t7zk6hz66&view=2up&seq=8>

(最終閲覧日：2020年3月20日)

注 13 『日本誌』の小笠原に関する記事は、田中(1997, p.19)及び松尾(2014, pp.113-114)に収録されている。

注 14 この名づけと直接にかかわることではないが、ケンペルはその植物研究で、現地名を重視する主義であったことは参考になりうる。たとえばイチョウは銀杏(ギンキョウ)から Ginkgo と間違っ綴られた。これは『日本国語大辞典』が転訛の(1)にあげた「文字の写し間違い」の例と言える。なおケンペルのこの現地名主義に対して、晩年30年をケンペル研究に費やした植物学者リンネは「非文明的な」名称と強い嫌悪感を抱く傾向があり、福建方言から借用されたチャの Thea の語を、ラテン語で女神を意味する Dea にかえようと考えたほどである。(ムンチック、1999)

注 15 「西洋各国にてこの島あるを知りしは千八百十七年(文化十四年)なりとは、或書中に見る所なれども、その発見せし人を記せず、・・・然るに、二十七年、(文政十年、)英国測量艦ブルスラムの甲必丹、ヒーチエーこの島に來り、其港湾の深淺等を測り、當時天文台の首長の名に取り、此島の名をフランシスベリーと命じ、之を英国の所領と定めて、その所由を銅板に鐫(ほ)り、樹幹に釘個し、国旗をも建たりといひ伝ふるを以て、當時既に流寓のものありしは察せられぬ、(世に行るる地図上には、この新に名づけたるベリーの名を用いすこれをポニン群嶋とするせり、これその人の住居するものなきより、我国にて無人嶋とよべるムニンの転訛せしものにてかのベリーの名はただ母嶋にのみととめたり)然るに亜米利加の流民セイボレの此地に來り、耕墾を試みたるは、実に三十年(天保元年)にして自ら其來れる以前に住民あらざりしことを証言せり・・・」。なお次のページでビーチ艦長の英国領有宣言にかかわり、「・・・ブリテン女王陛下ジョージ第四世の名をもって、この諸島を領せり」とある。これは坂田訳も原文も同じだが、田辺自身が岩倉使節団の書記官として訪英した時のビクトリア女王の印象がよほど強かったのだろうか。英国王ジョージ四世(在位1820-30)は、もちろん男性である。

注 16 延島(2011, p.30)、松尾(2014, pp.16-42)。

注 17 安岡(1960, p.72)は、サン・ジュアン号としている。(下線引用者)

注 18 この航海が、林子平が1785年の『三国通覧図説』付録の「無人嶋大小八十余山之図」に「此嶋ヲ和蘭ノ書ニウースト(荒地)エーランド(嶋ナリ)ト云」と注記した際の情報源だったかもしれず、別途、調査の余地がある。なお上記した1639(寛

永 16) 年の、オランダのエンゲル号とクラフト号の探検航海者クワストおよびタスマンは、沖ノ鳥島、北硫黄島・母島列島・父島列島及び聳島列島を望見したのみという。

注 19 小笠原村産業観光課 (2007、p.2)

注 20 大熊 (1969、p.173) は、紀州藤代の船頭長右衛門としている。(下線、引用者)

注 21 大熊 (1966)、大熊 (1969、延宝時の小笠原諸島の巡見、pp.154-170) が詳しい。栃内 (1929)。浦川 (2001、2011a、2011b) 等も参考になる。

注 22 国立国会図書館デジタルコレクションの坂田諸遠編纂『小笠原島紀事 31 巻首 1 巻 卷之二十六』に所収。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/994547> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)

注 23 安岡 (1960、p.78) は、島谷の『無人島乗前図』について、当時としては驚くほど正確に描かれていると評価する。

注 24 なお、『日本国語大辞典』には見出し語「高帆」の項の用例に、当該『延宝無人島巡見記』からの引用「帆長さ五丈、帆幅三丈、并柱上に有之高帆添木長二丈程、帆之長さ二丈七尺、幅同断」がある。

この無人島の読み方が「ブニンジマ」で、島谷調査隊が各島に父島、母島に始まる家族名を命名したとの説もある (豊田、2003、pp.390-391)。しかし島谷調査隊の記録として伝わる、前掲『小笠原島紀事 31 巻首 1 巻 卷之二十六』収録の「島谷市左衛門覚書」「延宝無人島巡査記」、および西尾市岩瀬文庫所蔵の『延宝無人島巡見記』(下線、引用者)を精査したかぎりでは、各島への家族名命名の事実は確認できなかった。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/994547> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)

ちなみに林子平『三国通覧図説』の無人島附図の説明では、「無人島大小八十余山之図 本名小笠原島ト云」と小笠原貞頼発見説を採用している一方、島名については北ノ島 (現在の父島)、南ノ島 (現在の母島) にとどめ、ファミリー系の名称は使っていない。なお林の地図には、大村、奥村、滝ノ浦などの今に続く地名がみられる。

注 25 ただし、江戸時代に無人島の名でよばれたのは、狭義の小笠原諸島には限定されなかったようである。磯野 (2001) は「無人島」と本文に記載している二つの記録を紹介している。「延宝九年西歳御浦方記録写」は 1682 年に、室津弥三右衛門の一行が津呂の御崎から西風に吹き流されて 11 日後に無人島に流着。三宅島経由で、江戸に参着した経緯を述べる。「貞享二午九月」は、1686 年に田野浦務平の一行が強

風のため湊に下船できず、流されて19日後に無人島に漂着。5か月余り滞在して、伊勢に帰着した一件の記録である。磯野は両島とも鳥が多いとの記述から、伊豆諸島に属するアホウドリの繁殖地、鳥島であろうとしている。

池田（1968、pp.467-501）は18世紀の、1719年と1785年にやはり鳥島漂着とみられる海難・漂流の記録について、「無人島」の表題を与えている。

注 26 当時の無人島の読み方をブニンジマとする説もあるが（たとえばチャップマン、2014、p.27）根拠は示されていない。

注 27 松尾（2014、pp.96-102）が詳しい。

注 28 ボダルト＝ベイリー・中（2009、p.147）によれば、当時のオランダ語習得法は文法を正確に学ぶことなしに、たんにオランダ人がしゃべる様子を耳にして、それを自分でもまねしてみる、という程度のものであり、年に一度の将軍拝謁時に通詞たちの語学力不足が白日の下にさらされることがあったとする。

注 29 1733年のオランダ語版が、同志社大学図書館に収蔵されている。

<https://library.doshisha.ac.jp/ir/digital/archive/beschryving/211/imgidx211.html>
（最終閲覧日：2020年3月20日）

注 30 ドイツ語版はロシアの知識人に歓迎された。クライナー「ごあいさつ」（国立民族学博物館、1990）に所収。

注 31 ボダルト＝ベイリー（1994、pp.233-236）は大英図書館の原稿を調査して、英語のオリジナル版、ドームのドイツ語版ともに、読者に断りない変更が加えられていることを指摘している。ハンス卿スローンのコレクションが大英博物館創設のベースとなったことから、今日のケンペル研究は大英図書館所蔵のオリジナルアーカイブを通じて進められるという。

注 32 ボダルト＝ベイリー（1994、国立民族学博物館ケンペル展図録 p.18）。なお、同図を所蔵している西尾市岩瀬コレクションは、大英図書館ケンペルコレクション本は同版ながら、刊年記を削除した後版であると指摘し、行基図風の古拙な日本全図と評している。

<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2321315100/2321315100100010/mp01930600>
（最終閲覧日：2020年3月20日）

注 33 これに対し、公儀が制作したはるかに正確な地図もあった。正保元（1644）年の「幕府撰正保日本図」はその一例で、実測図でこそないが、南波ほか（1969）はその正確さを「誠に驚くべき事」と評している。もちろん、「無人島」の記載はないが、これがケンペル以前の作成だったことに注目したい。だが板行はされず、さす

がにケンペルもこれにはアクセスできなかったようである。

注 34 辞典類を含め、本書の成立を 1785 年とする類書が多い。1832 年に『三国通覧図説』フランス語訳を完成させたクラプロートも、その例外ではない。よく見ると林子平本人の序文は天明 5 (1785) 年なのだが、冒頭の桂川甫周の序文は天明丙午とあり、これは天明 6 (1786) 年である。これを類書は見落としていた。従って、ここでは 1786 年の成立説を採りたい。

注 35 小笠原村産業観光課 (2007、p.5) は、島谷市左衛門の描いた原図は見つかっていないとしている。幕府の書庫ふかくに収められたものだろうか。

注 36 こんにちの父島とおぼしき島に二見湾のないこの小笠原諸島には、次の解説がある。「小笠原嶋一名無人嶋。此ノ嶋ハ八丈ガ嶋ヨリ巳午ノ方一百余里ニアリ信州深志ノ小笠原民部少輔貞頼者文禄の初年此ノ嶋を觀出 (ミイダ) ス嶋ノ広 (さ) 一百余里にして大小ノ嶋嶼多シ故ニ其ノ地ノ図並ニ土産ノ多品等。公ニ奉ル。令ヲ蒙リ小笠原嶋ト名ナヅク。其ノ時嶋ノ名ヲ定ム元嶋沖嶋ノ二名なり。而して嶋名ヲ極ム。惣テ大嶋七ツ、中ノ嶋十六。小島は甚タ多クシテ其ノ数ヲ未知スト云第一ノ大嶋ヲ父嶋ト云次ヲ母島次ヲ兄島次ヲ姉嶋次ヲ弟島次ヲ妹島次ヲ亀島ト云是なり。惣ジテハ無人嶋或ハ小笠原嶋ト号ス珍品ノ土産多シ委クハ伊豆ノ属島小笠原嶋ノ図ニ載ス依テ略ス」

以下、地図の書き込みを示す。

○元嶋一名父嶋 長サ三十里周囲メグリ一百余里天照太神宮ノ社アリ

○沖嶋一名母嶋長サ十八里廻リ四十里太神宮社アリ湊二ヶ所アリ

○兄嶋巡リ三十五里長サ十三里 此間鼈甲甚タ多シ

○姉嶋廻リ二十八里長サ十二里

○弟嶋此ノ海ニヲツトセイアリ嶋々ニワタル

○亀寫此海ニ鼈甲多シ

幕府は島谷探検隊の成果をあたかも封印してしまったかのごとくであるが、当時の人の知識欲がこのような形で、小笠原諸島に向けられていたことが分かる貴重な資料といえる。

注 37 過去に、地図に着目した秋岡 (1963、1965、1967)、木村 (1965) の関心は、島谷市左衛門の時代に向けられていた。幕末の地図に着目した平野の視点は重要である。なお、「嶋谷市左衛門無人嶋へ乗渡覚書、無人嶋渡海唐船之儀付書留」の全文を、秋岡 (1967) は収録している。

注 38 その後、国立国会図書館デジタルコレクション中に勝海舟の単語帳『訳鍵』(蘭和

- 辞典、勝、成立年不詳)を見出した。Woesteには「荒野、粗朴。荒レテラル。」とあった。
- 注 39 たとえば大熊 (1985、p.38)、田中 (1997、p.23)。
- 注 40 類書に「イギリスの歴史家チャールズ=R=ボクサーによれば、ティツィングは『三国通覧図説』の写本を自らつくりフランス人レミュザに与えたとする」との記述がある。Boxer (1936、p.18)に次のようにあるのが、該当部分と思われる。'Rémusat had secured Isaac Titsingh's own copy of the Sankoku Tsuran, which the latter had obtained from Japan.' ここでいう the latter は前者レミュザに対する後者ティツィングをさし、copy は動詞でなく名詞である。従って、これは「レミュザは、アイザック・ティツィングが日本から入手し所持していた『三国通覧』を手に入れた。」となる。
- 注 41 与謝野ほか (1925、pp.1-3)は、「『節用集』は室町時代にでき、江戸時代を経て明治にいたるまで広く世に行はれた通俗字書である。」とする。つまり、ことばの意味を解説する辞書ではなくて、字書ということである。節用集の中で最初期の刊行である慶長2年の『易林本節用集』(平井 1597)には「無人」の見出し語があり、ブニンの読みがあてられていた。これをレミュザが参照して Bou-nin および Bo-nin の表記を採用した可能性を考えたのだが、かれが勤務したコレージュ・ド・フランスの図書館には、これまでのところ彼の没後に出た 1850 年版『節用集』しか見当たらなかった。調査を継続したい。
- 注 42 彼をパリ大学教授とする類書もあるが、ここでは高田 (1996) にしたがって、フンボルトの推挙によってプロシア政府から教授号 (ボンのフリードリッヒ・ヴィルヘルム大学：東アジア学講座) を与えられ、高給と別に出版経費も得て、終生パリで研究に専念した人物と考えておきたい。
- 注 43 田中 (1997、p.22) はこれを 1825 年としている。なお、クラプロートの無人島に関する記述は、大熊 (1985、pp.32-37) に訳載されている。
- 注 44 1829 年論文 (Rémusat, 1829) p.163 の注でレミュザは、クラプロート氏は Mou-nin にこだわるが、王立図書館写本室に新たに入った漢和辞典では Mou-nin も Bou-nin も通じる旨を記載しており、クラプロートの批判に応えたと見える。この漢和辞典の書誌は不明。今後の調査に俟ちたい。なお、このやりとりについては、ドベルグ (1989、pp.64-65) が紹介している。
- 注 45 ただしクラプロートは図説をトセツ (to sets) と読んだ。日本国内では 19 世紀には書名の「図説」は「ツセツ」と読んでおり、クラプロートの読みが外れたと考え

られる。なおドベルグ（1989）は、クラプロートが旧蔵し仏訳の底本に用いた、書き込みの入った『三国通覧図説』をパリ国立図書館に見出し、詳細な検討を加えていて興味深い。同書 p.62 の整理によると、レミューザが「日本の地図から抜粋した BO-NIN 諸島または無人島の地図」と題した一枚の付図と共にフランスアカデミー機関誌に発表し（1817 年）、のち『新アジア論文叢書』第一巻（1829 年）に収録した。クラプロートは 1825 年、無人島の紹介を『アジア誌』に発表していて、翌年彼の著作集『アジアに関する論文集』第二巻に収録している。ドベルグ（1989、p.63）に図 8 として紹介されている「アベル＝レミューザ「無人島」付図」は、1817 年論文のものというが、筆者がオリジナルを参照した 1829 年刊行にかかる図と変わらない。Chapman（2016、p.9）が 1817 年論文の付図として紹介している図版（Figure 1.2）も同様である。しかし、筆者が参照した 1817 年論文の付図には、プニンジマのふりがながなかった。確認の意味で、双方の図に描かれた「無人島」の書き込み部分を、引用元となった林子平『三国通覧図説』とともに掲載しておく（図 12、13、14）。

注 46 これに対し、日本側の小笠原に関する情報の更新は遅れていた。瓜生（1874、pp.28-31）は「・・・また八丈の正南には遠く隔てて大洋の中に小笠原嶋ありて一名（めう）無人島（むにんしま）といふ島の数々九十四其内最も大なるは父島母島兄弟姉嶋妹・・・」と述べる。地図の二見湾は北に開口していて、『三国通覧図説』を踏襲している（図 22）。

注 47 インターネット調査によって明らかになった Bonin 姓の人びとを、順不同で次に紹介する。西欧から北米に散っていることが分かる（最終閲覧日はいずれも、2020 年 3 月 20 日）。

Charles Bonin（加）

<https://www.strava.com/athletes/11323373>

John P. Bonin（米）

<https://www.wesleyan.edu/academics/faculty/jbonin/profile.html#>

Jurgen Bonin（独）

https://www.apollo.io/people/Jurgen/Bonin/54a3db9b746869320930bf18?__cf_c_hl_jschl_tk__=36a12de451b6422065bc32c2a9c8ee6b7e6ff7ea-1578057820-0-Abwkct4AuHXCSl77U1PtTRoYfg7iJxXc1dVNJaBy5azO8WZW36bv_hbS_ebt8pLo_03cKn2aIClhrsApIwcSkyaAtKbAMJ3e5LNCntx124xedxTR6oRvxrmITu8i0Ttw8hMJKqQxA1tB17bSJ1wEjtZZzBi97j0IdfzoEfZVxk5fTGx260tz3GAjpr

4MTsCKJB9-G5Pz3-0O6KjAAy1l5JYAWGvCANeRiKDIvuwto-RlgyokHxVh
w52zhSshH9A2ph29ddReAPYue_Hk_bPm5pIbhS3cX1MaelwbPZWMdTPEy
Zzvi2Xz-SIRq2mxvCtAtL3nplnw4cH-brtu96fw8NxOMssfWP_UkYHao4-
4WUHTxyao5UYsHrTIbbdWfhKN1g

Pierre-Alexandre Bonin (仏)

<https://www.communication-jeunesse.qc.ca/createurs/pierre-alexandre-bonin/>

Helene Bonin (仏)

<https://www.linkedin.com/in/helene-bonin/?originalSubdomain=fr>

Hubert Bonin (仏)

https://fr.wikipedia.org/wiki/Hubert_Bonin

Dietrich Von Bonin (瑞)

https://www.researchgate.net/profile/Dietrich_Bonin

Wibke von Bonin (独)

<https://www.aica.de/ueberuns/mitglieder/bonin-wibke-von.html>

Mathilde Bonin (加)

<https://www.linkedin.com/in/mathilde-bonin-123737b0/?originalSubdomain=ca>

Joël Bonin (加)

<http://www.natureconservancy.ca/en/where-we-work/quebec/faces-of-ncc/meet-the-team/joel-bonin-reg-vp-qc-eng.html>

Cyril Bonin (仏)

https://fr.wikipedia.org/wiki/Cyril_Bonin

Gerhardt Von Bonin (米)

<https://www.biblio.com/gerhardt-von-bonin/author/1430515>

Hugo Rosenthal-Bonin (独)

<https://www.deutsche-biographie.de/sfz76981.html>

Hubertus von Bonin (独)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%BC%E3%83%99%E3%83%AB%E3%82%BF%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%9C%E3%83%8B%E3%83%B3>

Sophie Bonin (仏)

http://www.ecole-paysage.fr/site/ngcontact/c_1275921262371.htm

注 48 林子平の小笠原地図が国内に大きな影響を及ぼしたことについて上杉和央は、「こ

れは私の印象に過ぎないのだが」と断りつつ、「現在残っている模写図のなかで、ダントツに多いのがこの『三国通覧図説』の付図ではないか、と思う。正確に数えたわけではないし、また数えることもできないのだが、本当にいたる場所で出会うのだ。」と述べている（京都大学大学院文学研究科地理学教室ほか、2007、pp. 99-101）。

文 献

- 秋岡 武次郎（1963）小笠原諸島発見史の基本資料・地図について（1）. 海事史研究 1: 6-26.
- 秋岡 武次郎（1965）小笠原諸島発見史の基本資料・地図について（2）. 海事史研究 3&4: 45-57.
- 秋岡 武次郎（1967）小笠原諸島発見史の基本資料・地図について（3）. 海事史研究 9: 96-112.
- 馬場 章（2001）地図の書誌学－長久保赤水『改正日本輿地路程全図』の場合. 黒田 日出男・メアリ エリザベス ベリー・杉本 史子（編）『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会, 383-430.
- Beechey CFW (1831) *Narrative of a Voyage to the Pacific and Beering's Strait*, Henry Colburn and Richard Bentley, 742p.
<https://www.biodiversitylibrary.org/item/223050#page/7/mode/1up>（最終閲覧日：2020年3月20日）
- ボダルト＝ベイリー ベアトリス M（1994）『ケンペルと徳川綱吉』中央公論社, 255p.
- ボダルト＝ベイリー ベアトリス M 著・中 直一訳（2009）『ケンペル－礼節の国に来たりて』ミネルヴァ書房, 291p.
- ボダルト＝ベイリー ベアトリス M・マサレラ デレク編, 中 直一・小林 早百合訳（1995）『遙かなる目的地 ケンペルと徳川日本の出会い』大阪大学出版会, 298p.
- Boxer CR (1936) *Jan Compagnie in Japan, 1600-1817; An Essay on the Cultural, Artistic and Scientific Influence Exercised by the Hollanders in Japan from the Seventeenth to the Nineteenth Centuries*. M. Nijhoff, 190p.
- チャップマン デビッド（2014）国家の周辺を問う－小笠原諸島民の国籍、戸籍、アイデンティティ. 比較日本文化研究 17: 11-28.
- Chapman D (2016) *The Bonin Islanders, 1830 to the Present, Narrating Japanese Nationality*. Lexington Books, 225p.
- ドベルグ 美那子（1989）仏訳『三国通覧図説』をめぐる諸問題. 有坂 隆道（編）『日本洋

- 学史の研究 9 (創元学術双書)』創元社, 37-80.
- Edkins J (1862) *Progressive Lessons in the Chinese Spoken Language with List of Common Words and Phrases and an Appendix Containing the Laws of Tones in the Peking Dialect*. Presbyterian Mission Press, 114p. (艾 約瑟 『南京官話教科書』)
- 福井 文雅 (1983) 欧米における道教研究. 福井 康順・山崎 宏・木村 英一・酒井 忠夫 (監修) 『道教 第三卷 道教の伝播』平河出版社, 249-314.
- 船越 眞樹 (1992) 開拓と自然破壊の歴史. 小笠原自然環境研究会 (編) 『小笠原の自然－東洋のガラパゴス』古今書院, 38-45.
- 林子平 (1786) 『三国通覧図説』須原屋市兵衛, 56 丁.
- 平井 勝左衛門休与 (1597) 『節用集』慶長 2 跋. <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/253214> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 平野 満 (2001) 『伊豆七島全図 附無人島八十嶼図』, 『増訂 伊豆七島全図 附無人島八十嶼図 / 相武房総海岸図』の成立事情と著者, 附・小笠原島の旧名「無人島」は「ムニンシマ」. 蘆田文庫編纂委員会 (編) 『中間報告 (2)』明治大学人文科学研究所紀要 49: 376-382.
http://www.lib.meiji.ac.jp/ashida/articles/report_2001/hirano/hirano.html (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 池田 皓編 (1968) 『日本庶民生活史料集成 第 5 卷 漂流』三一書房, 886p.
- 石井 研堂編校訂 (1908) 『漂流奇談全集 再版』(続帝国文庫 第 22 編) 博文館, 1000p.
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992054> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 磯野 直秀 (2001) 日本博物学史覚え書 XI. 慶應義塾大学日吉紀要 自然科学 30: 23-48.
- Kaempfer E (1727) *The History of Japan, 2 vols*. London, 612p. (printed for the translator). <https://catalog.hathitrust.org/Record/001267765> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 片桐 一男 (1995) 『阿蘭陀通詞今村源右衛門英生』丸善, 276p.
- 片桐 一男 (1997) 『未刊蘭学資料の書誌的研究』ゆまに書房, 304p.
- 片桐 一男 (2004) 『平成蘭学事始—江戸・長崎の日蘭交流史話』智書房, 314p.
- 勝 海舟 (成立年不祥) 『訳鍵 (蘭和辞典)』勝海舟関係文書 124 (ページ番号なし)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11222567> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 木村 東一郎 (1965) 無人島の地図. 人文地理 17: 432-438.
- Klaproth J (1826) 『アジア関係論文集』*Memoires Relatifs a l'Asie*, 3 vols. 464p.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.32044037720877&view=lup&seq=11> (最終

閲覧日 : 2020 年 3 月 20 日)

Klaproth J (1832). 『仏訳三国通覧図説』 *San Kokf Tsou Ran To Sets, ou Aperçu Général des Trois Royaumes*, 286p. sur Google Livres

https://books.google.co.jp/books?id=lsoNAAAAIAAJ&pg=PAi&redir_esc=y#v=onepage&q&f=false (最終閲覧日 : 2020 年 3 月 20 日)

国土交通省都市・地域整備局 (2006) 『平成 17 年度小笠原諸島の自立的発展に向けた歴史・文化探訪観光開発基礎調査報告書』 国土交通省都市・地域整備局特別地域振興官, 233p.

国立民族学博物館編 (1990) 『ケンペル展 ドイツ人の見た元禄時代』 国立民族学博物館, 165p.

クライナー ヨーゼフ編 (1992) 『ケンペルの見たトクガワ・ジャパン』 六興出版, 294p.

クライナー ヨーゼフ編 (1996) 『ケンペルの見た日本』 日本放送協会出版, 252p.

京都大学大学院文学研究科地理学教室・金田章裕・上杉和央 (2007) 『地図出版の四百年ー 京都・日本・世界ー』 ナカニシヤ出版, 133p.

ロング ダニエル・橋本 直幸編 (2005) 『小笠原ことばしゃべる辞典』 南方新社, 364p.

松尾 龍之介 (2014) 『小笠原諸島をめぐる世界史』 弦書房, 232p.

松尾 晋一 (2019) 本光寺所蔵『無人島之図』長崎学 2: 71-80.

https://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/720000/724000/p032677_d/fil/matsuo2.pdf
(最終閲覧日 : 2020 年 3 月 20 日)

ミヒエル ヴォルフガング (1993) 西洋の地図に見る日本の地名. ドイツ東洋文化研究協会 (編) 『西洋人の描いた日本地図 ジパングからシーボルトまで』 ドイツ東洋文化研究協会, ページなし. (Michel W (1993) Japanese place-names on old western maps. In: *Japan-A Cartographic Vision* (Ed. By Walter L), Prestel-Verlag, 48-50. の邦訳)

<http://wolfgangmichel.web.fc2.com/publ/books/07/07japanese.html> (最終閲覧日 : 2020 年 3 月 20 日)

三好 唯義・小野田 一幸 (2014) 『新装版 図説日本古地図コレクション』 河出書房新社, 127p.

物集 高見編 (1925-1926) 『廣文庫』 広文庫刊行会, 全 20 冊, 各冊 1311-1312p.

森 幸安 (1752) 『日本分野図』 森 幸安.

森 幸安 (1754) 『日本分野図 第二版』 森 幸安.

ムンチック ヴォルフガング (1999) ケンペルの名を得た植物. ボダルト=ベイリー ベアトリス M・マサレラ デレク編, 中 直一・小林 早百合訳 『遙かなる目的地 ケンペルと徳

川日本の出会い』大阪大学出版会, 101-138.

長久保赤水 (1779) 『改正日本輿地路程全図』早稲田大学図書館所蔵の1846年版(請求記号ル11 01151)を参照.

https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru11/ru11_01151/ru11_01151.pdf (最終閲覧日: 2020年3月20日)

南波 松太郎・室賀 信夫・海野 一隆編 (1969) 『日本の古地図』創元社, 192p.

夏目 漱石 (1914) 『こゝろ』青空文庫(底本は1991年の集英社文庫版).

https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/773_14560.html (最終閲覧日: 2020年3月20日)

延島 冬生 (1996) 無人島はぶにん島か、むにん島か. 小笠原研究年報 20: 63-90.

延島 冬生 (2011) ユニークな島々の名前はどのように付けられたのか. ラメール 36(2): 30-31.

小笠原村産業観光課 (2007) 『History of Bonin Islands 小笠原歴史探訪ガイドブック』小笠原村産業観光課, 66p.

岡村 秀太郎 (1993) 『あなたのペット 犬と猫の秘密』国書刊行会, 192p.

大熊 良一 (1966) 『歴史の語る小笠原島』小笠原協会, 255p.

大熊 良一 (1969) 『千島小笠原島史考』しなの出版, 212p.

大熊 良一 (1985) 『小笠原諸島異国船来航記』近藤出版社, 193p.

Rémusat A (1817) Description d'une groupe d'îles peu connues et situées entre le Japon et les Iles Mriannes. *Journal des Savans*, July, 393p.

<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=nyp.33433108120563&view=1up&seq=72> (最終閲覧日: 2020年3月20日)

Rémusat A (1829) *Nouveaux Mélanges Asiatiques*. Schubart et Heideloff, 446p. https://books.google.co.jp/books?id=csxJl_hSURsC&pg=PR1&dq=Remusat,+Abel,+Nouveaux+Melanges+Asiatiques&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwiZ0MuZsYviAhWDwrwKHaoeC3UQ6AEIMDAB#v=onepage&q=Remusat%2C%20Abel%2C%20Nouveaux%20Melanges%20Asiatiques&f=false (最終閲覧日: 2020年3月20日)

六角 恒廣 (1988) 『中国語教育史の研究』東方書店, 419p.

榊原 透雄・飯田 辰彦 (1989) 『立ちこめる亜熱帯の体温 ボニンの島から』アイピーシー, 97p.

佐村 八郎 (1900) 『増訂國書解題』六合館(三冊), 2090p. (東出版1997年の辞典叢書①9復刻第一刷を参照)

- 渋川 与左衛門 (1994) 『早引節用集』 (安永 5 年 = 1776 年刊、宝暦 10 年 = 1760 年序) 『節用集大系 第 38 卷』 大空社, 357p.
- 島田 孝右・島田 ゆり子 (2006) 『近世日英交流地誌地図年表 1576-1800』 雄松堂出版, 294p.
- 塩山 正純 (2017) エドキンズの官話教科書が記述したことから. 関西大学東西学術研究所 紀要 50: 115-125.
- 詹 伯慧・樋口 靖訳 (1983) 『現代漢語方言』 光生館, 336p.
- 高田 時雄編 (1996) 『東洋学の系譜 欧米篇』 大修館書店, 301p.
- 田辺 太一 (蓮舟) (1898) 『幕末外交談』 富山房, 536p.
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/785647> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 田辺 太一・坂田 精一訳 (1988) 『幕末外交談 1』 平凡社, 268p.
- 田中 弘之 (1993) 江戸時代における日本人の無人島 (小笠原島) に対する認識. 海事史研究 50: 30-44.
<http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/~long/bonins/04tanaka.htm> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 田中 弘之 (1997) 『幕末の小笠原: 欧米の捕鯨船で栄えた緑の島』 中央公論社, 273p.
- Titsingh I ed by Rémusat A (1820) *Mémoires et Anecdotes sur la Dynastie des Régnants des Djogouns, Souverains du Japon*. Chez a Nepveu Libraire, 301p. (邦題『日本風俗図誌』)
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k96810387.texteImage> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 柄内 曾次郎編 (1929) 『増修洋人日本探検年表』 岩波書店, 179p.
- 豊田 武司編著 (2003) 『小笠原植物図譜 増補改訂版』 アボック社, 522p.
- 上田 万年・松井 簡治 (1915-1928) 『大日本国語辞典』 富山房 (五冊), 1242p.
- 浦川 和男 (2001) 延宝無人島巡検船の船頭は誰か. 海事史研究 58: 19-36.
- 浦川 和男 (2011a) 小笠原諸島発見史 (日本船編). ラメール 36(2): 12-18.
- 浦川 和男 (2011b) 小笠原諸島発見史 (外国船編). ラメール 36(3): 40-45.
- 瓜生 寅 (1874) 『改正日本國盡二 東海道附無人嶋』 名山閣書舗, 48p.
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1084330> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 20 日)
- 柳谷 武雄編・村上 直次郎訳 (1969) 『イエズス会日本年報 下 (新異国叢書 4)』 雄松堂出版, 297p.
- 安岡 昭男 (1960) 幕末の小笠原諸島をめぐる国際関係. 日本国際政治学会 (編) 『日本外交史研究 幕末・維新時代』 有斐閣, 72-82.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/kokusaiseiji1957/1960/14/1960_14_72/_pdf/-char/ja (最終閲覧日: 2020年3月20日)

横山 伊徳 (2001) 19世紀日本近海測量について. 黒田 日出男・メアリ エリザベス ベリー・杉本 史子 (編) 『地図と絵図の政治文化史』 東京大学出版会, 269-344.

与謝野 寛・正宗 敦夫・与謝野 晶子編 (1925) 『節用集 易林本 日本古典全集第一回』 日本古典全集刊行会, 280p. (覆刻版、現代思潮社, 1977年を参照)